

いつかのそら

夕貴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小さな小さな楽園のために、彼らは彼らのためだけに生きられない。
い。

そう分かっているながら自分の気持ちはままならない。

一騎の母方従妹の女オリ主主体のお話です。
自サイトにてマルチ投稿しております。

目次

いつかのそら	1	2	90
いつかのそら	1	1	82
いつかのそら	1	0	74
いつかのそら	0	9	64
いつかのそら	0	8	56
いつかのそら	0	7	48
いつかのそら	0	6	38
いつかのそら	0	5	31
いつかのそら	0	4	24
いつかのそら	0	3	16
いつかのそら	0	2	9
いつかのそら	0	1	1

いつかのそら01

あなたは　そこにいますか？

そう人類に問いかける主は、一体何と表したらいいのだろう。彼ら、否、それにとつてひとつは全部であり全部はひとつとの一見禅問答のような存在であるが故に、同じ遺伝子を内包しながらも個により全てが異なる人類というものに興味を持った。否、そのような感情を伴うものかすら怪しいものだったが、ともかくそれは人類に接触した。同化し理解してゆくとともに知ることは、それにとつて人類とはあまりに脆くあまりに愚かだった。よつてそれは人類を同じにする事でそれと同じ、更なる高次元の存在へと変化させる事を決めた。しかしそれにとつて同じにする行動は即ち同化。今までもそうやつて色々なもの同化してきたが、しかし如何せん人類はあまりに脆すぎた。同化しようにもそれまでに全てが壊れてしまう。何度も何度も何度も同化を繰り返すも全てが壊れてしまう。ひとつしかないそれは何故、どうして、どうやつたらというものを持たないため人類を知るためにいつも、いつも、いつも同じように同化するしかなかった。しばらくして、人類のなかに少し変わったものが出てきた。だが、それにとつてそれは些細な差でしかなく今日も今日とて、人類のように記すなら、極東で人々を同化してゆく。

それはそのうち、人類によつてフェストウムと呼称されるようになりその中心となるものは北極ミールと名付けられた。だがフェストウムにとつてそれも只の事象であるだけで、その目的は徹頭徹尾人類を同化することだった。

8

モーターボートのエンジン音と波の音が煩く、今はそれだけしか聞こえない船上から総士と灯華は近付く、「島」を見据えた。仮初の平和だと知っていながらそれを失いたくないと思うのはそれを知る島民皆の願いだろう。永遠の安寧などこないことは分かっている、それを望みながら去つていった先人達のためにもこうして2人は島、竜

宮島の外へと出た。その安寧とひと時でも長くするために。

「あ、そうそう。コレ。頼んだよ」

そういいながら船の運転手をしていた保は一つの茶色い紙袋を差し出した表面に沖方書房と書かれた、一見ただの紙袋だ

「大切な本だからね」

「・・・わかりました」

その本が重要な小道具であることを知っているからこそ灯華はしっかりと受け取り総士と共に島に一つしかない学校へと足を進めた。

「違うよ、そーじゃないって・・・あつ・・・」

「あ、きや」

「お、つと」

チャイムと同時に教室に入った途端、灯華は誰かにぶつかり咄嗟に抱えた本を守ろうとしたため体のバランスを崩しそのまま後ろに倒れそうになった。それを寸での所で総士が助け事なきを得た。

「ごめん。よく見てなかった・・・果林」

「灯華!?・・・皆城君。帰ってたんだ」

「ああ、さつき」

果林はお帰りなさいと笑うと、後ろから大きな声がかかりそちらに目を向けると

「総士、真壁お帰り!」

「おおーそれは麗しの最新号!!」

級友である甲洋と衛が二人の存在に気付いたのか声をかけたもつとも衛は二人よりも灯華が持っている紙袋が気になるようで視線がそれを物語っている

「待ってたぜ!!」

衛は灯華から本を受けるとと礼もそこに紙袋を破らん勢いで開き教卓の上で早速読み出した。その回りに数人の男子も集まり一緒に読み出した。『たった一人』のためにはじめられた本だったがこうやって何人もの子供に楽しみにされていたら『作者』も冥利に尽きるに違いない。それを眺めていると少し遠い所から声がかかっ

た。

「ねー灯華、皆城君。東京どうだった？」

灯華が目線を向けるとクラスの中でも昔から仲の良い真矢が手をひらひらと此方に向けていた。

「東京・・・」

総士はほんの数瞬、逡巡したらしいがすぐに思い出したらしくそれらしく言葉を重ねた。

「結構・・・普通のところだった」

「えー芸能人とか会わなかった？」

「全然」

「なーんだ」

いかにも不満ですという顔をして剥れる真矢を見る総士の視線が何時もより柔らかい事に気付いてしまい、苦いものが胸の内を苛むがそれを表面上はみせないようにして。そういつた時は従兄に縋るのが常だったので無意識のうちにその姿を探そうとしたが教室内には居ない。チャイムが鳴ってすぐに教室内に入ったのにどこに行っただろうか。

「真矢・・・一騎知らない？」

「授業が終わった途端、近藤君と出て行ったわ」

「そっか、じゃ探してくるね。またねー」

ひらりと手を振って教室から居るであろう場所、——大抵は屋上か中庭、校舎裏にいる、を思い描きどこから回ろうかと算段しながら廊下を歩いた。

「ほんと仲いいよなー一騎と真壁」

「従兄妹同士だからな」

甲洋が総士に話かけながら灯華の後姿を見送っていた。

灯華には両親が居ない。物心付く前に事故で亡くなり母方の従兄の家族、真壁家に引き取られた。ちょうど一騎と灯華は同じ年そして共に親を亡くした者同士という連帯感もあってか兄妹のように、時には姉弟のように確かな絆を持って育ってきた。そのためか2人の正確な関係を知らない後輩などは双子と誤っている人もいるらしい。

「あんなもんなのかな？ 従兄って。ほとんど兄妹みたいじゃんあの2人」

「さあ？…僕にはよく分からないな」

総士には甲洋の問いに答える術はもっておらずはぐらかし、同じように教室から外に出て行った。そのような存在が総士の傍には居ないのだから。

屋上にはいなかった。中庭にもいなかった。残るは校舎裏だけだと灯華は意気込んで下駄箱へと向かっていた。ここまで探してもう帰っていたら泣くぞと思いがら下駄箱の中にある靴を手に取るとすぐ上のスピーカーから妙な雑音が洩れてきた。機械の調整でもしてるのかと取り立てて気にせず上靴から履き替え校舎口から1歩足を進めた途端聞こえてきた声。

あなたは そこにいますか？

天啓。空から降るようにして聞こえてきた声。下駄箱の、運動場の、緊急用のスピーカーから。波のように聞こえてくる唄。

本能的に土足のまま校舎内に戻り最短ルートを計算し、職員室前までたどり着くと何人かの教師と合流した。皆が向かう先には年季の入った校舎に不釣り合いな光沢をもったエレベーターが待機しており、灯華がそれに飛び乗るとすぐさま扉は閉められ下層へ—Alvis、アルヴィスへと運ばれた。

島中に警報が流れ、役目が無い人は防護シェルターの中へ、役目のある人はそれぞれの位置へと就く。そんな中、真矢は幼馴染が心配で自転車に乗って家路へと急いでいた。

「おい！そっちにシェルター入り口はないぞ！」

「うん。ありがとう！」

近くに居たおじさんの親切な言葉に返事を返しながらも聞き入れず、それよりも、おそろくまだ自宅へいるであろう翔子の事が気になるって仕方が無い。体も弱く、気も弱い翔子だから、恐らく一人では外を歩くことさえ満足にできないだろう、そう思うと自然にペダルをこぐ足に力が込められた。ふと、前を見ると街灯の影が動いている。見間違えかと思いい転車を止め、タイヤの影を見てみるがやはり影が

動いていた。まさかという思いで後ろを向くと、空の色が変わっていき。そして、

「太陽が・・・」——消えていく——

ありえない言葉を続ける事はできず、恐怖感から空から目を逸らし真矢はまたペダルを漕ぎ出した。

「翔子！」

「真矢っ・・・真矢・・・」

真矢が心配したとおり翔子は家の前で心細そうにして立っていた。思わず安心して真矢は駆け寄り翔子に抱きつき翔子も安心したように体の力を抜くのが分かった。

「一体何があったの？クーも逃げちゃって・・・」

「クーはきつと安全なところに逃げてるわ。私達も避難しましょう！」

翔子を支えなくてはと真矢が決意している所に聞きなれぬ爆発音がし、あたりが微かに揺れる。恐怖にしがみつく翔子を抱きしめながら見上げると、奥の山の頂上付近が少し赤く染まっている。

——本当に、一体何があったの？——

疑問ばかりが浮かぶが今は逃げる事が先決であると思い翔子を支えながら羽佐間邸を後にした。

メインモニターに映し出された映像は想像だにしていなかったものが映った。

「うずまぎ・・・？」

「これが、フェストウム」

その姿を知らない者はこれこそが「敵」の姿かと声をあげたが、それらを知る者から否定の声があがる。

「いや、こんなものではない！」

「単体密度2.33、原子量28.0855、因制度1.88、質量固定。フェストウム実体化します！」

報告と共に雲の渦は霧散し、変わりに光り輝く物体が出てきた。人型、とも言えなくも無いがある意味人とはかけ離れた姿をしていた

しかしそれは金色に輝きき、あまりにも美しかった

「綺麗・・・」

「本当に」

せわしなく動いていたのが嘘のように皆モニターに釘付けになる。その場にいた多くの者達は肉眼で把握するはじめての敵の姿にしばし見とれていた。

「美しいものだが、人類の味方とは限らないものだ」

司令官である公蔵の言葉を裏付けるように島の防衛最外にある重力波バリア、通称ヴェルシールドへの攻撃がはじまりすぐに突破された。それを見越して配置されていた守備隊が散開し飛散型ミサイルを同時に発射するも、それはすべて当たらず海上へと落ちた。圧倒的な戦力差を見せ付けられながらも戦闘機部隊は果敢にもフェストウムに向かっていく、が戦力差はどうにもならず全機破壊された。その直前、全パイロットの精神状態を表すグラフがゼロを示していたのがせめてもの救いか。

「これが、フェストウム・・・」

今まで資料でしか見たことの無かった敵の力に灯華は自分の体が底冷えしていくのを感じた。たった1体でこれほどの戦力というのは資料上、データ上でわかっているとしても、それは分かったつもりでしかなかったのだ。

「難しいな」

「我々にはもう、巨人を覚醒させるしか生きる術はないのか・・・」

公蔵の少しの沈黙と共に一つの決定が下された

「ファフナー起動フェイズスタンバイ!!パイロットは？」

「現在ヴァーンツベックでブルックへ向かっています」

唯一人訓練されたパイロットは既に戦闘を見越してか慶樹島へと向かっていた。登場者は果林。これまで竜宮島の秘密を守っていた仲間の1人が島へと向かっていた。慶樹島までまだもう少しあるから通信をいれてみようかと灯華が通信スイッチを押すと共にもたらされる悲報。

「竜宮南方250メートル付近で信号消滅！パイロット及びスタッフ1名生死不明！」

「何だと!？」

フェストウムからしたら無差別に攻撃を繰り返しているだけにならなかったのだろうか、それが偶然か運悪くヴァーンツベックを直撃してしまったらしい。唯一の正規パイロットと共に苦楽を共にした友人が亡くなったとは信じられず灯華は咄嗟に何度もスイッチを押すが、反応はない。

「嘘でしょ、果林」

友人の死に意識が向きそうになるのを飛び交う報告が許さない。流したい涙を飲み込みまたメインモニターに目を向けた。

フェストウムは剛瑠島からの攻撃により動きを止められていた。

「目標捕獲!」

時を待たずして総士が叫んだ。

「父さん! 僕が代わりにファフナーで出ます!」

だが公蔵は首を振り許さない。

「総士、お前達にはお前達にしかできない事があるだろう」

その言葉に総士は上を、灯華は自分の足元を見つめ共に小さく呟いた。

「ジークフリードシステム」

「・・・クリエムヒルドシステム」

「できるな? 総士、灯華君」

そのために自分達は今まで訓練を重ねてきたのだ。

「はい」

「わかりました」

問いかけの言葉に対する返事は一つだった

「総士」

「なんだ?」

二人は現段階でのファフナー搭乗者の最適任者である人物を迎えに行くため最短ルートで開かれている通路を歩いていた。この通路は全シエルターに通じており今は指示に従ってその人物の居るシエルターへと向かっている。

「私・・・怖い」

「フェストウムが？システムが？」

「両方が。でもそれ以上に…」

彼を失うかもしれないという事実には。

独特の音がして二重になっていたシエルターのドアが開き、気圧の変化からか空気が舞い総士と灯華の髪をなびかせた。風圧に閉じていた目を開けると、放送でもあったのか一騎はドアの前に立ち総士と灯華を待っていた。後ろでは級友が遠巻きに三人を見ている。

「総士、灯華。俺達は何処へ行くんだ？」

確実に何かが起こっているのに詳細を知らされないまま無為に過ぎる時間。その間に何かを感じ取ったのか一騎はそう2人に問いかけてきた。何かが起こっている、けれどそれが何なのか分からない。けれど何かを成さねばならないと何処からか何かが訴えてくる。漠然とした考えの先に何が待つのか分からず2人に問いかけた。すると総士が当たり前のように応えた。

「楽園だよ」

そう、楽園だったあの安寧の時間を取り戻すために戦うのだ。

いつかのそら02

機材搬送用通路を使い一騎と総士はファフナーが保管してある慶樹島へと向かい灯華は別行動を取り地下へ、ウルドの泉へと向かった。灯華の行動を予測してか自動的に隔壁や扉が開き難なく目的地へと到達した。普段であればもう一つのルートを使いスーツを着こんでシステムに乗り込むのだが緊急事態のため普段着のまま乗り込む。はじめで、ではないが実戦でははじめて乗り込むクリエムヒルトシステム。亡き肉親が作り出したというこのシステムは灯華にとって遺産ともいうべきものだった。何の因果か灯華が乗り込むと決まった時には戸惑いよりも嬉しさが残った。記憶に残っていない親の愛情の形を受け取ったような気がしたからだ。

「おかあさん・・・乙姫ちゃん・・・一騎を守って」

小さく呟き灯華はシステムの中へと足を進めた。自動的に降りてきていた椅子に座ると接続器具が両肩両脚に取り付き「感覚」を強制的に同化させる。その痛みには未だになれないながらもなんとかニーベルングの指輪に指を差し込む。

「・・・クリエムヒルトシステム」起動」

灯華の声紋がパスワードとなりシステムは起動し、椅子は上昇し所定の位置についた。

「ニーベルング動作確認、クリエムヒルトシステム動作確認・・・」

あとは総士のジークフリードを待つだけになり心を落ち着けてその時をまつ。ヴウン、と独特な音を立てて感覚が共有された。

「ジークフリードシステム」接続」

総士の声が聞こえ、その姿が視える。

「総士」

「待たせた。ジークフリード、クリエムヒルト接続完了。ファフナー・マークエルフ発進スタンバイ」

嗚呼、戦闘がはじまる。

「一騎」

「一騎。！起きて一騎」

微かに聞こえる声を頼りに一騎は目を覚ました。すると右隣には総士が、左隣には灯華が視えた。

「なんでここに・・・」

今、自分が乗っているのはファフナーの中だと頭が覚醒してきて何故自分かここにいるのかも思い出した。あんな狭い場所に3人も入るわけない。なのはどうして2人は居る。

「脳の視聴覚野に直接クロスリンクした」

「ファフナーの中の一騎と、ジークフリード内の総士、そしてクリエムヒルド内の私は、直接脳の神経細胞が繋がっている状態なの・・・最も、シナジティックスーツを着てないから完全とは言えないんだけどね」

言われた言葉の単語単語は難しいはずなのに一騎の頭はすんなりとその事を理解した。それを問おうかと思ったがとりあえず今はやめておこうと何となく思った。

「一騎、いまからはファフナーと一体化することを最優先に考えるんだ。まずは目を開けろ」

「目を？」

「そうよ。ファフナーの目は貴方の目。ファフナーは貴方なのよ」

総士と灯華の言葉に素直に従って一騎は目を閉じ、”目を開いた”。するとこの機体に乗る前にみた無機質な格納庫が見えてきた。

「見えた！」

「行こう！奴が近づいている」

そして、巨人は目覚めた。

「一騎、射出までにかいつまんで説明するからしっかりと頭に入れてね」
「なんだ」

射出までの短い時間でさえ総士は忙しくキーを叩く。本来であれば果林が乗るために調整されてきた機体だ。いそいで一騎用に設定を変えているのだろう。その辺りの事は灯華がサポートする事はできないので一騎に簡単に説明をすることにした。

「敵の名前は通称フェストウム。私達が戦う相手。そのために命令を下すのが総士の “ジークフリード” システム。その命令を実行しや

すいようにサポートするのが私の“クリエムヒルド”システム」

「要するに総士が総隊長で灯華が分隊長みたいなものか？」

「・・・ええ。そう考えてもらったら早いわ。そしてもう一つ。『クリエムヒルド』は戦った女の名前。戦闘をサポートする為に私は居るの」

本当に簡単な説明を終えると共に全プログラムを書き換え掌握も終えた総士から声が掛かった。もう腹を決めていた一騎だったが未知の状態に微かに手を振るさせた。それに総士は気付いたが何も言わず、灯華は触れられないと分かっているでもその手を重ねた。

「よし・・・。第11ナイトヘーレ開門！ファフナー・マークエルフ発進！」

途端すさまじい重力が一騎の体を襲った。堪えきれない声が一騎の口から洩れ目が細まる。アルヴィス内のドッグを抜けると海の中へと続き、それを抜けると青空が広がっていた。

今まで見てきたものと違う、直感的にそう思った。

「一騎、そのまま地上へ！」

「分かった」

マークエルフは灯華の言った通り一騎の体となって動き、コンクリートで覆われた岸壁へと降り立った。その衝撃からコンクリートがガラスのようにヒビを入れ割れた。

「割れた・・・」

「コンクリートぐらい割れちゃうわ。総士が状況報告をしてる間にこつちも説明するね。今居る場所は慶樹島、ファフナー関連の格納庫になってるわ」

見回した島は軍事施設として作られたかのように様相を変えていた。竜宮本島からは遠く肉眼では確認しにくいが一度も降り立ったことの無い島ではない。その時にはただ普通の島であったはずだ。それが今はどうだ。一端の軍事施設になっているではないか。

「来るぞー！気をつけろ！」

一騎はファフナー内の警告音と総士の警告により直ぐ目の前に敵が迫っていることを知った。けれど、一騎の目に映ったのは黄金色に

輝く美しいもの。

「あれが・・・あれが・・・敵？」

「そう、あれが敵なの。美しい敵。あれがフェストウム」
その姿にしばし見とれる。

——あなたは　そこにいますか？——

「言葉・・・？」

雑音と共に聞こえてきたのは声。確か校舎裏のスピーカーから聞こえてきたのもこの言葉だったようなと記憶を刺激される声に無意識に声を出そうとした所を総士の声に止められた。

「答えるな！思考を侵食されるぞ!!」

——あなたは　そこにいますか？——

一騎から応答が無いからか再び声が掛けられる。それにも返事がない事にしびれをきらしたのか、フェストウムの指が触手化してマークエルフへと向かう。

「よけて一騎！」

灯華の警告も一瞬遅く、マークエルフは触手に絡みつかれて身動きが取れなくなってしまう機体はいいように遊ばれてしまう。攻撃を受ける事により焦りそれが機体の動きを鈍らせまた攻撃を受けるという悪循環を総士の言葉が断ち切った。

「二騎・・・ファフナーそのものを感じる。一体化するんだ」

その言葉に灯華の言った言葉も思い出し己がファフナーだという感覚を取り戻せ、腕を動かし一撃を与えようと考えた。

「・・・え・・・？・・・」

「読まれてるー！」

そのまま機体の肩をつかまれ、フェストウムに引っ張られ地面へと叩きつけられる。何度か地面の上で回転した後ようやくマークエルフは止まった

「・・・っあ・・・」

「くっ・・・奴は？」

「直ぐ後ろだ！」

丁度空を背にする形で倒れていたのが、フェストウムにより反転させられ固定された。逃れようともがくも中々逃げられず、フェストウムは頭と思わしき場所から顔を剥がし内側から緑に輝く結晶を発生させた。

「なんだ!？」

「いかん!!奴は同化するつもりだ引き剥がせ!!」

同化が何を意味するのかは分からないが本能的に危機感を感じ何とか動く左手でフェストウムの腕をつかもうとした。だが、それは致命的だった。

「一騎!だめっ」

「だああああああ!!」

「・・・あああっ!!」

フェストウムを触ろうとした先からマークエルフの左手は消えていく。その痛みは神経をも接合しファフナーと一体化している一騎にとって己の左手を失ってゆくのと同等の痛みを与える。クリエムヒルドにより搭乗者と密に繋がっている灯華にもその痛みは同じように伝わるも少々の耐性があるため思考を鈍らせることなく判断を下す。

「っペインブロック作動、左腕切断します！」

一騎とマークエルフの左腕の接続を外し痛めた部分を強制排出すると今までの痛みが嘘のように無くなり一騎は思わず自分の腕を見てしまった。

「一騎!早く逃げて。また同化される!!」

「え・・・!!」

「あの水晶が同化の始まりなの！」

緑に輝く水晶が灯華が説明していく間も段々とマークエルフの中へと消えていき、マークエルフのコックピット周辺から実体化して出て行く。不思議と痛みを感じる事はないが、緊急を示すアラートが鳴

り止まず焦りだけが募ってゆく。

「くそ・・・動かない!!どうなつちまつてるんだ総士!!」

「分らない!そっちのモニターが突然遮断された!・・・脱出させる灯華!」

脱出はイコール機体を失うことに繋がるため最終手段とされているが、ためらわずに総士は灯華に命令を下した。こんなにも早く脱出機能を使うようになるとは思わなかったが、灯華が隙を伺っているのひとつの通信が割り込んできた。

「二騎君レールガンを使え!!」

「皆城の、おじさん」

それは司令部にいるはずの公蔵からの通信だった。司令部に常駐しているはずの主は海中に鎮めてある空中輸送機リンドブルムのカタパルトの中から通信をしているらしい。まだあそこは未完成のはずなのに何をするのだと公蔵からのデータを見ると、レールガンをミサイル状にして一騎へとまわすという。

「まだファフナーからの電力供給が出来ない!!一発で仕留めるんだ!!」

「父さん!!」

少しの沈黙の後、海中からせり出した射出口と思わしきものから一発のミサイルが発射され見事フェストウムに着弾。直後、カタパルトは消失し通信も途切れた。それが何を意味するのか誰もが分かったが、総士はとりわけ冷静に一騎へと声をかけた。

「・・・一騎!!レールガンを!!」

「二騎、落ちついて・・・動かせる範囲で一杯に動かしてレールガンを受け取って」

ミサイルからはじき出されたレールガンをなれぬ動きで、だがしっかりと受け取った。一騎も公蔵との通信が途絶えた事は分かっていたのでしっかりと其れを握り、その時を待った。

「今よ一騎!レールガンをあの前部分に差し込んで!!」

一騎は何を考えるでもなく、反射的に機体を動かしレールガンの先をフェストウムの頭の部分、核へと捻りこんだ。その衝撃で自然に指

に力が入り、レールガンは撃たれた。

一騎が安堵の息をついた次の瞬間コックピット内は真っ白な光で包まれ、気がつけば今度は真っ暗になっていた。視界と感覚が全て閉じられてしまったため、コックピットが強制射出された事もフェストウムが黒い球体に飲み込まれて跡形も無くなった事も分からなかった。

「目標完全に消滅」

「パイロット生存を確認」

「コックピット回収を急げ・・・各施設の被害は？」

「要君？」

「・・・あ・・・はい。恵寿島の上空施設60%が破損、武島は滑走路の一部を含む第二次装備が壊滅」

「大分やられたな・・・竜宮は？」

戦闘後の報告、主に被害報告が淡々と続けられている。竜宮島での初の戦闘は幾人もの死者、行方不明者を出した。戦闘に耐えうるとは思っ居なかつたが予想以上の島への損害に史彦はため息を我慢しながら続けられる報告を聴いてゆく。これまでは公蔵の役目だったがこれからは・・・自分がしなくてはならない。史彦は握りこぶしを強く強く握った。

アルヴィスのシエルターから出てきた島民は島のあまりの変貌に愕然となるしかなかった。島そのものが様変わりしていればまだよかつたのかもしれない。ここは自分達の場所ではないと言い張るところができたかもしれない。

「これが・・・俺達の島かよ」

「嘘だろ・・・そんな・・・」

だが見慣れた風景が多く残り、これが変わり果てた自分達の居場所であると受け入れるしかなかった。

平和だった楽園は終わったのだ。

いつかのそら03

検査と着替えが終わりにリクライニングルームで何かを飲もうと向かっていると狩野由紀恵とすれ違った。アルヴィス内では同僚の立場ながら1歩外に出てしまえば教師と生徒の関係のため灯華は軽く頭を下げて通り過ぎた。これが真矢の姉の弓子であれば立ち止まって世間話でもするのだが由紀恵の事は昔から苦手だったので万が一にでも話しかけられると面倒なため早足で通り過ぎた。何を飲もうかなと部屋に入るとぱしやと水音がしたのでそちらの方を向くと紙コップが水溜りに落ちていた。

「誰かいますか？」

「灯華か」

「あ、総士。零したの？」

姿は良く見えなかったけれど声で判断し、隅の道具入れからモップを取り出して総士が零したコーヒーをぬぐってゆく。めずらしいな、と思いながら紙コップをゴミ箱に投げ入れモップを元にもどし、総士の用のコーヒーと自分用のジュースを手椅子へと座った。

「はい」

「ありがとう」

何時にもまして口数が少ないのは戦闘後の疲労と、公蔵が亡くなった事に対するものだろう。灯華をはじめての戦闘による疲労と、幼い頃からこの島の秘密を共有してきた数少ない友人を亡くし口を開く事はあまりできなかった。二人が死んだという実感があまりにも少ないのだ。フェストウムによる戦闘では何も残らないのが普通なのだ。フェストウムの攻撃を受けるとその存在を霧散させられ、自分達の“先輩”によれば同化現象が完全に進むと体組織総結晶化の後に砕け散り何も残らなかったという。そしてその先輩も最後には居なくなつた。

「結果はどうだった？」

「予想通り。多分ずっと進行していくって」

「そうか」

「うん。しょうがないよ」

戦闘後の検査結果でやはり、常のデータより灯華の体は同化現象が進行している事を告げられた。それはクリエムヒルドシステムだけでなく島を制御するシステムに総てに取り付けられているミールによるものだがこれの代用となるものは見つかっていない。

「私達が大人になるのが早いかな、それとも」

「灯華！」

「ごめん」

―それとも、完全に同化してしまうのが早いかな―

常なら言いそうにない言葉を総士が遮った。自分でも思った以上に今日の事が堪えているらしく一気にジュースを飲み干した。どちらが早いかなど、考えなくても分かるというのに。

「家、帰るね」

「僕も一緒に行こう」

「え？」

「もう一騎も家に帰ってる頃だ。話がある」

総士もコーヒを飲み干し用済みになったコップをゴミ箱に捨てた。

「ちつくしよ・・・」

一騎はいつもの家路を悪態をつきながら進んだ。自宅までの道のりをこんなに遠く、そして自分の体がいかに重く感じるがあったのだろうか。石段一段一段上るのも一苦労。ようやく自宅の玄関までたどりついたがそれを開く力が出てこず寄りかかり息を整える。荒い自分の呼吸音の合間を縫って石段から足音が聞こえる。なんとなく予想がつき、振り返ってみると自分と同じようにアルヴィスの制服を着込んだ総士と灯華が立っていた。

「総士・・・灯華・・・」

二人共妙に制服が似合ってるのが、感に障る。

「一騎、話がある」

「ああ」

一騎を気遣ってか総士はゆっくりと石段を降りてゆき、その後を一

騎が追ってゆく。海にでもゆくのだろう。灯華は少し考えたがスカートのポケットから鍵を取り出して家に帰る事を選んだ。総士は一騎に全て話すのだろう。今の島の状況そして自分達がおかれている現状。竜宮島の本来の姿、日本が壊滅した事、ファフナーという巨人、フェストウムという敵の存在。それらを話すのは総士一人で事足りると灯華は判断し帰ってくる一騎と史彦のために夕食を作ろうと台所の前に立った。

「ただいま」

「おかえりなさい、叔父さん」

先に帰ってきたのは史彦だった。家の中にまだ一騎が居ない事を確認すると少し安心したように息を吐いた。恐らくまず何を言えば良いのか帰宅までにおもいつかないまま帰ってきて少し困っていたのだろう。その様子が可笑しくて笑って居間に戻るように促した。食事が出来るまでの繋ぎに、とお酒と沢庵を卓袱台の上において調理を再開するとタイミングよく一騎が帰ってきた。史彦と何かを話しているようだが此方までははつきりと聞こえない。だが、二人はすれ違うことなくきちんと会話をしている。これなら大丈夫だ、と出上がった料理をお盆にのせ居間へと運んだ。

いつも通りの食事を終え、お風呂にも入った所で灯華はなんとなく玄関から外に出て石段に座って島を眺めていた。一日で色々と変貌してしまった島だが暗闇に覆われると何も無かったかのような普段と変わらない夜景を見せてくれていた。まだ変わらないものもあるとどこか安心してしばらくそれを長めていた。カラカラ、と玄関の開く音がしてちらりと視線を向けると一騎が玄関前に立っておりゆつくりと灯華の横に座った。

「灯華も総士も知ってたんだな。色々」

「うん。知ってた」

「隠してたのか？」

「んーそうね隠してた。知って欲しくなかった、からね」

今日の前にあるものが作られた現実だという事を知らずに居れば、それは本物と変わらない。それを態々言う必要性はどこにもないと

大人達は頑なに口を噤み子供達に教えなかった。時折どうしようもなく口をつけて出そうになる言葉を無理矢理飲み込みながら総士、灯華、そして果林も何も言わなかった。

「知らない方が幸せなんてありきたりだけど、それでもぎりぎりまで守りたかったの。この平和な島を」

「そっか」

頭を一騎の肩に預けるとゆっくりと頭を撫でてくれた。心地よい感触を堪能しながら変わらない夜景をしばらく見つめた。

灯華にとって一騎は従兄で家族で兄だった。幼い頃に親を亡くした灯華をひきとってくれたのは母方の親類の真壁父子だった。父と息子の組み合わせの家庭に女兒を引き取らせる事に難色を示す者もいたが、べつたりと一騎から離れない灯華に皆一様に様子を見守る事にしたのだ。当の灯華と一騎はそんな事は露知らず2人離れず毎日を過ごしていた。起きる時もご飯を食べる時もお風呂の時も寝る時も。そんな風に過ごしていたせいも、事情を良く把握していない者からは実の兄弟、時には双子だと誤認される事もしばしばありその度に史彦は苦笑しながら訂正をするのだ。年齢と共に少しずつ世界が広がると共に双子のように息を合わせるのは難しくなるが、変わらず一騎は灯華にとってかけがえのない存在であり失えない存在だった。そんな彼を戦いに送り出さなければならぬという苦しみと、あの総士と灯華と一騎だけの3人だけでいられる空間はどこか甘美なものだと感じてしまう後ろめたさ。その2つの感情が口について出た言葉は謝罪だった。

「ごめんね」

「なにが？」

「全部が。隠してた、戦いに出した、危険なのにかばえない、同じ場所に立ってない」

灯華の謝罪の言葉に一騎は変わらず頭を撫でながら何も言わなかった。何も言葉では伝えられなかったが、それでも灯華はきちんと一騎からの許しを受け取り甘えるように一騎の肩に擦り付けた。

次の日、島の唯一の葬儀場では戦闘での犠牲者の合同葬儀が行われ

た。島の殆どの住民は訪れ、犠牲者のために参列した。

「知ってた？蔵前って・・・ロボットのパイロットだったんだって」

「だから一緒に避難しなかったのか」

「蔵前はさ・・・戦ったのか？」

「さあ。それは、父ちゃん教えてくれなかったけど」

犠牲者の名簿の中にクラスメイトの名前を見つけ子供達は動揺を隠せなかった。死の詳細は子供達には伏されていたが巨大ロボットのパイロットであったことは人伝で皆聞いている。あの大人しそうな果林が巨大ロボットの操縦者と中々繋がりにくく、また敵による攻撃の結果死ぬというあまりに現実からかけ離れている事に実感も持てなかった。ロボットだけでなく未知の敵との戦いなど、漫画の中の世界でしかありえなかったのにそれが現実などと、たちの悪いドラマをみているような気分になる。

「そのロボットって私にも乗れるかな？」

だが、咲良は少年達とは逆の想いを持っていた。敵に父を殺され、あまつ遺体すら見つかっていないという。大きかった父の身長にあわせて作った棺桶には生前使っていた小さな日記帳が代わりに収まるだけだ。それが一層咲良の憤りを大きくさせ父さんの敵を討ちたい、その願いは強くなる一方となる。

「え・・・」

「マジすか？死ぬかもしれないんだよ」

「でも、一騎は乗ったんだろ」

「そう・・・らしいけど」

「ならあたしも絶対に乗ってやる」

咲良の強い願いが叶ったのか、後日ファフナーに新しいパイロットが配属される事となる。羽佐間翔子、春日井甲洋、要咲良、近藤剣司、小楯衛。皮肉にも選ばれたのは灯華達と同じ年の子供達だった。

「新しいパイロット・・・ですか？」

「ああ、まだファフナーには空番があるからな。今日もうここに来る手筈になっている」

史彦に呼び出された一騎、総士、霜華の3人は新しい仲間が増える

ことをそこで告げられた。昨日今日の戦闘で1人でこなすには非常に難しい事は実感していたので仲間が増える事はそれが楽になるので有難い事だったが、新しい仲間の名を聞いて眉を潜めた。皆、同じクラスの友人なのだ。戦争時だとわかっていてもどこか遣る瀬無かった。

アルヴィス内に到着した友人達を軽く案内した後、当人達は訓練に、総士と灯華はパイロットが増える事に対するそれぞれのシステムの再構築、一騎もマークエルフの調整へブルクへと移動した。今日はそれだけで終ると思われていた頃、敵襲来を示すアラートが全島に流れた。皆一旦作業を中断し、それぞれの持ち場へ――総士はジークフリードシステムへ、灯華も着替えた後クリエムヒルドシステムへと搭乘し、パイロットの一騎を待つ。

「灯華、リンドブルムを使用する」
「了解」

総士から送られてきたリンドブルムのデータにきつと目を通し、送られてくる敵のデータそして招かれざる客のデータも頭に叩き込む。それが全て終わった時点で一騎がマークエルフに搭乘してきて2人とクロツシング状態へとなり灯華、総士の持っている情報が自動的に一騎にも流れ込んだ。

「空を飛ぶのか？」

「そうよ。だーいじょうぶ」

「俺は飛んだことないからな」

「飛べるさ、僕達は1人じゃない」

巨人のうえに更に空を飛ぶ事に一騎は思わず躊躇したが、何時もの様子の灯華と総士に逆に力が抜けて一騎も少し笑うことができた。

リンドブルムで島の上空を飛んでいると招かれざる客、新国連の偵察機と少し離れた所にいるフェストウム。新国連は、味方ではなくむしろ三つ巴の敵といっても過言ではない。だが同じ人類という陣営だということとところが完全な敵としてみる事ができず総士と一騎の間で意見の相違を生んでしまう。偵察機を囮とし打ち落とされた後なんの後顧の憂いもなくフェストウムとの戦闘を開始しようという総士

の考えを一騎は納得できず灯華の静止もむなしく動いてしまった。慣れぬ空中戦を総士の指揮の下どうにかしていたが、リンドブルムからマークエルフを切り離し攻撃を仕掛けた後、落下するマークエルフのフェストウムの追撃がかかった。

「一騎！」

総士がリンドブルムを必死に操縦し救い出そうとし、灯華はコックピット射出の準備をするも一瞬の差で間に合わない。

——その時だった、唄が聞こえてきたのは。

歌詞のない唄が島に、アルヴィスに、マークエルフに響いた。聞き覚えがないものの、心地よい唄に一騎の尖っていた気持ちはそれが抜け周囲を広く見渡すとマークエルフの周りに小型の飛行機が飛びシールドを展開し、自分を守ってくれている。

「これは・・・シールド？なんで」

「無事か！一騎！」

「ああ。でも、なんで、あれは何」

「大丈夫、ノルンよ」

総士の心配そうな言葉に返事をし言葉を重ねると灯華の呟きが聞こえた。その直後灯華の気配が霧散しクリエムヒルドとのクロッシングが解かれた事を示す表示が現れた。

「灯華！」

名を何度も呼びかけるも、すでにクロッシングが解かれているため彼女に届くはずもなく。仕方なく総士は一人一騎に寄り添い戦いを続ける。

下層へ、更なる下層へ。戦闘中にもかかわらず全てを投げ出し求める場所へと一刻も早く到着するために最下層についたエレベーターから飛び出した。ひとつ、またひとつ地下という場所に相応しくない巨大で荘厳な扉が迎え入れるように自動で開く。まるで灯華を迎え入れるように音もなく、静かに。最後の一枚が開くと同時に灯華は叫んだ。

「乙姫ちゃん」

だが、彼女の声色の期待とは裏腹に件の乙姫はまだ目を閉じていた。彼女を守る柩の中で安寧の眠りに付いていた。だが、かつて乙姫と同じだった灯華には分かっていた。彼女が先程、一時、眠りを途切れさせていた事を。そして今までの深い深い眠りとは違う、ごく浅い微睡みへと変わった事を。

「乙姫ちゃん、乙姫ちゃん、乙姫ちゃん」

灯華は乙姫の眠る柩に縋り付くようにして幾度も名前を呼ぶ。傍から見れば、それは聖女に許しを請う罪女の様相だった。

いつかのそら04

灯華が投げ出した後の戦闘で一騎が新国連の偵察機を見捨てられなかったため、隠して隠して隠し続けてきた竜宮島の存在が明らかに知られてしまった。これについて戦闘を投げ出した灯華が何かを思うのはお門違いなのだが。それでも面倒臭い事になったとAlvisの自室のベッドの上で取り留めもなく考える。——もちろん、彼女は現在戦闘放棄による謹慎中だ。

二日も部屋の中に閉じ込められていたにも関わらず灯華の精神が堪えなかったのは、時折感じる乙姫の存在だろう。機械を通さずに乙姫の覚醒を感じ取れる事はまだ誰にも告げていない。灯華と乙姫だけの秘密だと頭に思うかべると、乙姫が小さく笑った感じがした。そんな穏やかな二日の後にはいきなり仕事を振り分けられた。

「あ、灯華一体どこ行ってたのよ！家にもいないし！」
「ご、ごめん咲良。ちよつと謹慎してた」

「謹慎?!何したのよ！」
「何って、戦闘放り出した…」
「放り出した!?何してんのよ!!」

連絡係だった総士に連れられて行った先にはクラスメイトの姿。その中でも咲良は怒髪天を突く怒りっぷりにどうも彼女をなだめるために総士は灯華をここに連れてきたようだ。そういえば謹慎は3日のはずだったのに1日早まったのだが、もしかしなくてもこのせいかもしれない。総士が後ろで深い、深いため息をついているのがその証拠だろう。

新国連とのやり取りも重要だが、それ以上に重要なクラスメイトの訓練は順調とは言わないながらも、着実にその成果をだしていった。一騎に比べてしまうとそれは遅いと表現しても過言ではないと分かっているながら、総士はそれに少々苛立ちを表し灯華はそれを宥める事も多々あった。一騎が特別なだけで他の友人達の能力が一般的なのだと一体何度総士に言い聞かせただろう。灯華とて、初の戦闘が一騎と共にだったために彼と同じように皆に指示を出すすがそれが出来

ないものだ」と反応を返してもらいそこで漸く分かったりしたのだ。総士と灯華、そしてパイロット達も共に手探りながら共に戦う術をみつけていつていた。しかし、時折

「——一騎なら」

「——一騎だったら」

このような一言が出てしまうのは仕方のない事だった。

「総士、しばらく一騎は禁止ワードにしない」

「……いいだろう」

「一騎って言葉を出したら罰ゲーム」

「何をするんだ」

「私は総士に手料理あげる。総士は三つ編み」

「僕の方が傷が深いから却下だ」

「えー」

「それより、要の変性意識だがどうにかならないのか」

「咲良に言ってよー」

それにしてもクラスメイトの変性意識のバリエーションの豊かさには頭が痛い」と総士と2人で頭を抱えてしまう。元々個性の強いメンバーなのに、ファフナーに乗ってしまうとそのアクが更に強くなるというおまけつきだ。その中でも最も目につくのが翔子だ。彼女は元々体が強くない。だがファフナーに乗ってしまったえばそれは関係なくなる上に、仄かな恋心を持っている一騎の隣に立てる喜びを爆発させてしまっている。彼女はこんなにも激しい想いをもっているのだとはじめて知ったのだが、それは羨ましいものでしかなかった。こんなにも綺麗な想いで一騎を思えるなんて、なんて羨ましい。

その翔子が、戦闘で死んだ。

次にいなくなったのは、甲洋だった。

果林が、翔子が、甲洋が。以前にも先輩が人知れず死んでいったのを目の当たりにしてきたが、その度なんとか堪えてきた。死んだ、また死んだ。次は誰が死ぬのだろう。虚ろな心で取り留めもなくそう考えながら自販機で買ったココアを口にする。購入してから時間が経っていた事にも気づかないぐらい惚けていたらしい。生ぬるい甘

さが舌にまとわりつく。それに眉を寄せていると、総士が休憩室の入口に立っている事に気がついた。

「総士」

目だけで付いてくるように言われ、飲み干していなかったココアをゴミ箱に捨て総士の後をついてゆく。目的地は言わずもがな総士の部屋。部屋に通され、適当に椅子に座るとその向かいにあるベッドに総士が座った。

「結果はどうだった」

「見る？」

「ああ」

総士の部屋にある備え付けの端末から灯華のデータにアクセスをし、それを総士に渡した。そのデータをみて総士はひと言、言った。また同化が進んだな、と。端末の隅に表示されている時刻はもうすぐ日付が変わろうかというところだった。こんな時間に真壁の家を出てふらふらと夜遊びをしていたのではなく、真矢の母親に健康診断をしてもらっていたからだ。連戦に次ぐ連戦。いつの間にか灯華の指には聖痕のようにニールベルグの十個の指輪の痕がくつきりとなっていた。その痕が濃さを増すように、灯華とその胎内に植え付けられているフェストウム因子も濃く同化してゆくのだ。母の胎内にいる時にフェストウムに襲われ、他の子供たち以上に濃くフェストウム因子を胎内に取り込んでしまった過去を持つ灯華がクリエムヒルド・システムに搭乗する。その結果が総士の持つデータなのだが、それに後悔をするような事はない。

「濃く、なったな」

「そうだね。抑制剤も一番濃いやつ使ってるんだけど、そろそろ利かなくなるかも」

ベッドから立ち上がった総士は灯華の指にくつきりと見える聖痕に指で触れた。指と指を絡ませしばらく指を心の赴くがままに遊ばせる。ふ、と指から目をそらし総士を見上げると彼は此方を向いていた。指を絡ませたまま灯華の方を向く総士の表情を、彼は自身で認識していないだろう。指を絡ませたまま椅子から立ち上がり、目を閉じ

灯華は総士にキスをした。総士が息を飲んだのがわかったが、絡ませた指に力が入った事で彼がこの行動を受け入れた事がわかった。何度も軽く唇を合わせ目を開けると総士も目を開けていた。

「――あ」

何を言いたかったのか自分でも把握していない。だが、それを切っ掛けに指は解かれ――灯華の腕は総士の首に、総士の腕は灯華の腰に回され一層密着し再び唇を合わせた。この行動が、これからの行為がまだ「子ども」の2人には過ぎたものだと分かっているも灯華も総士も止める事が出来なかった。世界で唯一、互いの立場と気持ちと考えと、そして痛みを分かち合える者同士縋りつきたかったのだ。

灯華の初恋は一騎だった。同じ年で家族で従兄弟な男の子は誰よりも身近で、多分恋心よりも家族として妹としての好きが9割の好きだった。それでも灯華にとっては誰よりも大事で大好きな人。そして目の前でぎこちない手つきで灯華のスカーフを緩めていく人は、本当に好きな人。総士の事がいつから好きだったのかは分からない。幼馴染の1人な事もあり小さな頃から一緒に行動していた。乙姫の兄という事もあり引け目もあるからこそ他の子より気を使っていた。それがいつからか彼に嫌われたくない、彼の役に立ちたい、彼の隣に立ちたい、彼を支えたいという明確な想いとして形作られていた。ああ、好きなんだなあと実感してからは坂道を転げ落ちるようにその想いは成長していった。

「総、総士……」

「泣くな」

「泣いてない」

「…そうか」

知らず流れていた涙を総士が指で拭ってくれる。けれどどうして自分が泣いているのか灯華も分からず、どうしようもない虚勢を張ってしまったが総士はそれを苦笑一つで流してくれた。そんな行動ひとつにも好きだという気持ちが薄皮一枚分増えてしまった事がわかった。これ以上この気持ちを育ててしまうと総士に気づかれてしまうのではないかと不安になる。この気持ちをどうすればいいのか

分らないうちに当人に気付かれてしまうのは非常に困ることだった。それに、総士の視線の先にはよく真矢が居る。総士が彼女の事が好きなのかまでは確認できていないが、それでも他の同級生よりも気をかけているのは分かる。けれどそれ以上に嫉妬心を抑えきれないのは――

総士の左頬に伸ばした手を、取られ指を絡めて縫い付けられてしまう。

彼のアイデンティティを占める、一騎が付けた左目の傷。総士に、一騎にどちらに嫉妬しているのか分からない。口づけられ、規則的な律動を下半身に受け、初めて感じる微かな快樂のなか灯華は不意に咲良に会いたいと思った。彼女の全てを吹き飛ばしてくれる笑顔を見たいと思った。

∞

総士と灯華は昔から幼馴染として一騎と一騎に居た。とはいえ男女の違いからか昔は家族だからとなにかにつけ一騎と共にいる灯華の事を鬱陶しく思った事もあった。総士にとって一騎が一番大事で大好きな幼馴染で一緒に遊んでいる時が何より楽しい至福な時間だったのだ。まだ遊び足りない泣いて何度父親を困らせたか分からない。だがあの7年前の日、何も知らなかった総士たちが天啓に返事をしてしまった日から遠くない日、総士は思いもよらない場所で灯華に会ったのだ。メモリージングを開放され、実妹がいる事も知らされ頭の中が混乱している所にはじめてAlvisに連れられてこられた。その最下層のワルキューレの岩戸の中に妹がいると教えられその扉の先には、箱の中にいる妹とその前に立つ灯華。

「なんで灯華がいるの?」

「総士もなんでここにいるの?」

総士は自分をこの場に連れてきた父親を見上げると総士と灯華に訳を説明してくれた。総士には灯華の立場を、灯華には総士のメモリージングを開放した事を。公蔵の説明だけでは納得のいかなかった

た2人は暇があればお互いの立場を話し合った。メモリージングが開放された事で2人は他の子どもたちとどこか一步すれ違うような感覚に陥る事が多々あった。それは島の秘密を知ってしまった事で大人ではないがそれでも子どもより一步進んだ立場に立たされる事となったせいなのだが、その事を感じながらも言葉にできないもどかしさから総士と灯華はよく2人きりで話す事が多くなった。それに他の子どもが気づかないはずもなかったが、2人が最近自分たちよりぐっと大人びた印象を与えるためその関係をはやし立てられる事はなかった。おかげで2人はゆつくりと色々な事を話す事ができ、総士はそれまで知らなかった灯華の立場や考えを知り、また自分の考えも灯華に知ってもらおう事ができるようになった。

「今日の予定は？」

「乙姫のところに行くけれど灯華はどうする？」

「私も行きたい。鞆置いたらすぐに行くね」

「そういえば今日は海野球するって誰か言ってたけどいいのか？」

「どうせまた西と東の対抗でしょ？普通にしたいから私はいいや」

パタパタと教室を出る灯華はそのまま隣のクラスの一騎のところに行くのだろう。昔は灯華より一騎の傍に居たのだが左目に傷をつけられて以来一騎と共に行動することは全くなくなってしまった。反動するように灯華と共に一騎に行動するようになったのだがそれは思ったより過ごしやすいもので拒む事はなかった。

「総士、今日は灯華をこっちに頂戴よ」

「なんで僕に言うんだ」

「だって灯華ってば最近総士にばかり着いていくんだもん。前は私と一緒にいたのに」

「灯華に直接言っつてよ」

「言っただけどあんまりコッチに来てくれないから総士から言っつてよ」

鞆の中に教科書を詰め込んでいると隣の席に座っていた咲良から文句が出たがそれを無視する事で断りそのまま小学校を後にした。その時心を占めた感情が何だったのか未だ答えは出していないのだが、今こうして灯華を腕に抱いている事が恐らく答えなのかもしれない

いとぼんやりと考える。子どもな自分たちには過ぎた行為だとお互い分かっていても止めなかった。互いにそう長い間生きられない身が齎した種を残そうとする本能なのだろうか。その機能は自分たちの世代には残されていないはずなのだが、本能がそれを促すのであればなんと滑稽なのだろう。だが、それは目の前の灯華だからそれが刺激されたのだろう。だがそれが口をつけて出る事はなかった。

総士の存在意義がこの島と妹なのだと伝えたのは誰だっただろうか。否、伝えられなくとも自ら感じ取ったものだったのかもしれない。父は表向きは校長先生という立場であるが、一度地下に潜ればこの島の全てを任される総司令官であった。その息子はどのようになり振る舞わなければならないか、教わらずとも気づいて分かって実行していた自分だ。もっと愚かであれば幸せだったのだろうと思う事が全てを物語っていると自覚しながらも口は開かない。

——僕は、僕のためだけに生きられない。

総ての言葉を飲み込み、総士は腕の中にいる灯華をきつく抱きしめた。

いつかのそら05

クラスメイト2名が居なくなった重苦しい教室内では皆が言葉少なかった。戦時中でもしかかもメモリージングを開放された子供たちが勉強する意義とは一体何なのかと1人ノートに取り留めもなく落書きをしながら授業を聞き流す。一騎も気がそぞろなようですぐ横にいる灯華が彼の方を幾度向いても気付いた様子はない。普段ならすぐに気がついてくれるのにと少し寂しく思いながら、気の入らない授業を聞き流すため机の上に突っ伏した。

「総士、話がある」

「……分かった」

放課後、皆が帰宅準備をしているところで一騎が意を決したように総士に話しかけていた。2人はその場で会話をする事を選ばずどこかへと向かうようだ。2人の後ろ姿を少しだけ見詰めその後ろをついてゆく事にした。

2人は戦場の痕が生々しい海岸を会話の場所へと選んだ。灯華が後ろをついてきている事を総士と一騎の2人が気づいているかは分からないため、入り組んだ護岸の片隅で2人の話を聞くことにした。「どうしても聞いておきたいんだ。ファフナーと俺達、お前にとつてどっちが大切なんだ？」

翔子が甲洋がいなくなり一騎が何かしら考え込んでいる最中に出くわすことが多々あった。どうしたの？と問いかけてみてもなんでもないとほぐらかされる。灯華には言えない事、彼がそう口を閉ざすのは総士の事だけだった。だからこそ灯華はそれ以上口を挟まずに一騎の心のままに任せていた。だが、それで良かったのだろうか。まさか一騎の口から己の存在意義を問いかける事が起ころうとは思ってもよらなかった。

「……どんな返事を期待しているんだ？」

総士は総士の立場、考え、想いがあり一騎のその問いに心のままに応える事ができないと灯華には分かってしまう。その場を取り繕うための言葉を紡ぐだけの小器用が無い事も知っている。

だから、

「フアフナーだ」

そう答える総士の言葉に深く深くため息をついてしまうのは呆れからか諦めからか、憐憫からか。そう思えるのは灯華が一騎以上に総士の立場もこの島のあり方も、世界についても明るいからだと彼女自身で思い至れなかったのは、やはりまだ彼女も子供だということなのだろう。

「僕に必要なのは、この左目の代わりと成るものだけだ」

そのため灯華は一騎を慰める適切な言葉を思い浮かべられず一騎が走り去る姿を見送り、1人まだ埠頭に佇む総士の隣に静かに立った。何も言わないところをみると灯華が近くににいる事にきづいていたようだ。

「総——「僕は本当の事を言っただけだ」

灯華の言葉に覆いかぶさるように総士は一息で言い切った。その言葉に灯華は何もいう事はなく小さく頷いた。そう彼にとっても彼女にとつての存在意義はフアフナーでありこの島である。それが分かるのはこの島では互いに互いだけ。それはとても寂しくて悲しくて、少しだけ甘美なものだった。

家に帰り一騎の顔をまともに見ることができると思えなかったのが総士と共にAlvisへと戻り、そのまま部屋を共にした。珍しく夜中目を覚まし、総士のベッドから起きAlvis最下部へと進んだ。そこではいつものように乙姫が静かに眠る。

「乙姫ちゃん。ねえ、私……いいのかな？」

真夜中でも日中でも静寂を保つ場では灯華の声だけが響く。それは乙姫に問いかけながらも、言葉は己にも響き自ずと自らにも問いかける形になる。

「私は卑怯だ。一騎に嫌われたくないから総士に全てを言わせながら、一騎を慰める言葉も見つけられない。絶対一騎、傷ついているのに私は総士に縋り付いて……」

本当に嫌になる程自己保身が強い、と呟くも乙姫は何も伝えて来ない。それが答えのような気がして早々に場を去った。

総士の部屋に戻るか、それとも自分の部屋に戻るか。分岐点となる通路で灯華は自分の部屋を選び左に折れた。そして寒々しい自分の部屋に一歩足を踏み入れた途端足から崩れ落ちた。

「———いたい」

呼吸もままならなくなる程の痛みが全身を襲う。フラツシユバツクだ。戦闘時、クリエムヒルドに乗ることによりファフナー搭乗者の痛みを共有する。それは実際には負っていない傷の痛みを感じるという脳にとって矛盾する出来事は、それを解消するかのように戦闘後も痛みを再発させる。まるで本当の傷が痛むかのように。床に激突した衝撃も体を駆け巡る痛みの前には霞んでしまう。意識を失えたほうが楽になるのだが、この時は異常に脳が活性化しているらしくそれは望むことができない。できるのは対処法としての投薬だけだ。痛みが緩んだところで必死で体を動かしポケットの中に常備しているタブレットを無理やり飲み込んだ。一番効果が出やすいのは注射形による液薬の摂取なのだが、痛みを抱えた腕で己に針をうまくうてないことからそれは禁止されている。タブレットは飲むだけで楽なのだが効果がでるまでに時間がかかる。

痛いなあ

痛みにより声を出すことすら億劫なため脳裏でそう呟きなんとか痛みをやり過ごす。一体どれだけの時間が経ったのかはわからないが、やっと薬が効きだしのろのろとベッドの上に這い上がった。びっしりと冷や汗をかいているがもう一度シャワーを浴びる元気もないため、そのまま目を閉じた。

明日の朝、シャワーを浴びたら一騎に会いに行こう。何のためにという目的は思い浮かべられなかったが、それでも一騎に会おうとまどろむ頭でそう考えた。

そのせいか灯華は朝早く目が覚めた。フラツシユバツクの影響で体を動かすのも億劫だったので気ばかりが急ぐ。シャワーを浴び終わりベッドの上で髪を乾かしていると外をバタバタと走る音がした。外は通路なのだから別に足音がしてもおかしくはないのだが、それにしても何人もの慌てたような足音が響く。戦闘なら何よりも誰より

も先に総士と灯華に通信が入るはずなのだが。それともシステム上で何かあったのかなとのん気にドライヤーで髪を乾かしていると警報が部屋中に鳴り響いた。戦闘時とも違う、聞きなれぬ警報音。

「島を出て行く者に、興味はありませんよ」

飛び込んだ司令室に響いた総士の言葉。メインモニターに写るにはリンドブルムとマークエルフ。一騎のファフナーだ。ソロモンの応答を示す表示は出ていないのになぜファフナーが出撃しているのだ。

「なんでリンドブルムが出てるの!?あれを動かしてるのは誰?」

誰かなど私たちが分からずして、誰がわかるのか。不安から総士に掴み掛かるも総士は視線を合わそうとはしない。

「落ち着け灯華」

「叔父さん」

見かねて史彦が間に入り灯華の腕を総士から引き離した。灯華は離された手を握り締め踵を返し司令室を後にした。

手近な通路から地上に出てわき目も振らず早朝の島内を走る。まだひんやりとする空気が生乾きの髪を冷やしてゆく。時折住人に呼び止められそうになるもそれをすべて振り切りただひたすら走る。

「あ、灯華。おは…灯華?」

それはすれ違った咲良にも変わらず灯華はその傍を走り抜けた。その妙な様子にランニング途中だった咲良は後をついていった。すると灯華は真壁家へと入っていった。

「一騎!!一騎!!」

開け放たれた玄関から聞こえるのは灯華が一騎を呼ぶ声。泣きそうな声音に早く返事を返してやれよと咲良が思うもなかなか返事が聞こえてこない。その間にいろいろと扉を開け閉めしながら一騎を呼ぶ灯華の音がするもふ、とそれが途切れた。以降物音がしなくなつたため恐る恐る幼い頃の記憶を頼りに2階にある一騎の部屋の前までゆくと、その前でペタンと座り込む灯華の姿。

「灯華どうした?一騎…?いないのか?」

襖が開け放たれた一騎の部屋には誰もいなかった。Alvisに

でもいるのかと咲良はとつきに思ったが、灯華の表情にぎよつとした。呆然と、涙を流しているのだ。

「一騎……どこ……一騎……」

「一騎がどうしたんだい灯華」

そこで灯華はようやく咲良が傍に来ている事に気づいたらしい。そこでくしゃつと顔を歪めて泣き叫んだ。

「一騎一騎一騎一騎！なんでなんで！」

「ちよつと、灯華？」

「なんでどうして！」

あわてて咲良が灯華の横に膝をつく、腕を伸ばしてすがり付いてきた。それに咲良は必死になだめようとするも一向に涙と嗚咽がとまる気配はない。

「言ったのにつ……」

——『大丈夫。俺は霜華と一緒に居るよ』

「一緒に居てくれるって……言ったのにつ……」

それは幼い頃の約束だった。

それは他愛のない約束だった。

泣いている女の子に男の子がかけた優しい約束だった。

——『ぼくが、ずっといつしよにいてあげるから。だから、なかなかい』

S

「一騎の奴、全然見かけないなあ。Alvisで缶詰にでもなつてんのかあ？」

「え、知らないの？」

今日は珍しく全く会わない一騎に剣司は不思議に思っていた。普段なら登学日には必ず来ていた一騎だったが、今日はまったく姿を現さずに放課後にまでなってしまった。しかも今日は総士も灯華も姿を現さない。彼らは戦いを強いられているため剣司たちとは少し

違った生活を余儀なくされていると母親から聞いていたので、そのせいなのだろうか」と剣司は単純に思っていたがそうではないと衛が耳打ちした。

「それが噂なんだけどさ、一騎と狩谷先生が……」

「っえ!?……うっそーそんな関係だったの?あの2人」

そんな2人を鉄棒の上から眺めていた咲良は顔を顰めた

「許されぬ恋。年の離れた2人の選択した道は、か・け・お・ち!!すげーすげーすげー!」

「うっさい」

「いつてええ」

一騎と由紀恵の噂に興奮して身振り手振りを交えて大騒ぎする剣司に咲良は一発後ろから拳を振るった。鉄棒にぶら下がってしまったのだから何時もよりも力がはいらなかつたのが残念である。

「そんな洒落たもんじゃないわよ。あいつは怖くなって逃げただけ。敵前逃亡よ」

敵、咲良の言葉に一騎の出奔はただそれだけ以上の意味を彼らに齎す事に2人は漸く気づかされた。今までフェストウムと主に戦ってきていたのは一騎だ。主力がいなくなるという事は誰かにその負担がかかるといふ事だ。翔子も甲洋もいなくなった今、辛うじて咲良だけが使い物になるレベルの戦闘力で剣司と衛は未だサポートから抜け出せていない。だがこれからもそうは言っていられない。

「敵前逃亡したらどうなるのかな?」

「……さあな」

衛の疑問に軽く返事をして剣司は空を見上げた。一騎はリンドブルムに乗り島を出たという。何もかもを捨て、由紀恵の言葉のままに。

「でもさ、意外だよな」

「何が?」

咲良が鉄棒の上から剣司を見下げた。

「一騎が灯華を置いてった事。だって、あいつ一騎いないとすぐ泣いてたじゃんかよ」

「泣いてたのずっと昔の事だよ」

「でも一騎が居なかったら見つかるまでずっと泣いてたぞ。俺、一騎が見つかるまで泣いてる灯華みてよくそんなに涙でるなーって感心したし」

「そこは感心するより慰めようよ」

幼い頃からの付き合いのある者たちにとって灯華の中心にいるのは一騎だと認識していた。段々と成長すると彼らの世界が広がると共に灯華の一騎への執着が薄まってきていると感じてきたが、それでも一騎が灯華の手を離し放っておくとはどうしても思えなかった。考えた事もなかった。あんなに一心に慕ってくれ、そして大事にしていた灯華を一騎がこんな裏切りともいえる格好で。

「そんで灯華は？」

「さあ…それこそAlvisなんじゃない？」

「あたしの家だよ」

「へ？」

「え!？」

一騎の噂が流れても総士はいつもの通りに登校していた。だが、その隣に灯華の姿はみえなかった。フェストウムとの戦いがはじまって以来総士の隣に灯華がいる事が自然となっていたの総士が1人で行動しているのが不思議に映った。一騎がいなくなった事で灯華はAlvisで泣いているのかと剣司と衛は勝手に思っていたので咲良の言葉に驚いた。

「な、なんで」

「一騎が居なくなつた日に偶然会つたの。そのあと熱出したからウチで看病してるの。Alvisには今居たくないって」

咲良はそう言い、一回転して鉄棒から飛び降りた。

「灯華、熱に浮かれながらずっと一騎呼んでるんだよ。泣きながら」

一騎の罪は敵前逃亡よりもっと酷いものだと言った。咲良は告げた。

いつかのそら06

一騎が島を出ていった。疑惑のあった由紀恵との逃亡は一部では聞くに耐えない醜聞となつていようだが今の総士にはそれを打ち消すための行動を起こすことはあまりにも億劫だった。一騎なら、言葉にする事が苦手な自分の気持ちいつか汲み取ってくれるはずだと独りよがりな期待を胸に抱き、それが叶えられなかったからと一人落ち込み。なんて自分勝手なのだと分かっていたが、それでも沈み込む心を押し上げることは困難だった。せめて、といつも傍らにあった存在を期待して目で探すもそれも今は無い事に握った拳に今以上に力を込めた。

〇

一騎と由紀恵が出ていった後の真壁家の一室で溝口と史彦2人が顔を合わせ出来事の原因をこれからについて話し合いを行なっていた。だが、なぜ一騎が島を出ていったのか直接的な要因は憶測でしか測れず、また主力のパイロットと機体がいなくなる緊急事態にも関わらずそれを補う他パイロットの育成が間に合っていない。先の見えない話題を少しでも変えようと溝口は最近見えない灯華について話を向けた。

「そいや、灯華は？俺、何処に居るのか知らねえんだけど」

「灯華は、要さんの家に居る。熱を出してるらしいが…」

「まあ看病なんかは女の人によってもらうほうが良いもんな。お前じゃお粥つくるのもハードル高いじゃねえの」

溝口の言葉に流石にむっとした史彦だが、お粥などここ十数年食べたことはあれど作った事がない事を思い出し言い返す言葉が見つからなかった。

「まあ男親じゃあ中々手出しできない部分もあるよなあ。一騎と違って」

「まあ、な」

「その辺りは要センセに任せるしかないか」

「——なあ、溝口」

それまで回していた電動ろくろと土に触れていた土まみれな自分の手をじつと見つめ脳裏に昔を思い出した。

「俺はちゃんと親をやれているか？」

「は？」

「一騎と灯華の親を、ちゃんとやれているのか？」

灯華は産まれる前に、一騎はまだ彼の記憶も定かでない幼い頃に母親を失っている。その2人の保護は史彦に一任されがむしやらにやってきたが、その結果が一騎は出奔。昔から何かと一騎にひつついていた灯華は家には帰ってこない。

「まあ、なんだ…俺に聞かれても分からん。俺は子供がいねーからな」
「…そうだな」

「とりあえずわかるのはこれだ。俺に聞くな、2人に聞け」

ちらり、と溝口の方を見ると良い事を言ったとばかりに胸を張っている姿に苛立ちを憶えて口を開いた。

「聞けないから聞いてるんだろう！」

「あ、それもそうか」

∞

咲良の家はいつも穏やかな空気を感じると、部屋から庭先をぼうつと眺める。昔から何度も通った家だったが、こんな風に客間に泊まるのは初めてだった。泊まる時はいつも咲良のベッドと一緒に寝ていたが背も伸び、しかも今回は病人のため澄美が開けてくれたのだ。今日は澄美はA i v i sで、咲良は学校に行っているため1人ですつと要家にこもっている。なんとなく本を眺めたり、部屋の縁側から庭に出てみたりするも結局は縁側に座り込み何も考えずにぼうつとしているのだ。もう何も考えずにいられたら、どんなに楽だろう。

「お帰り、咲良」

砂利が踏まれる音がしたため、最近のように咲良が庭先から帰ってきたのかと姿を見る前に声をかけたがいつものように返事が帰ってこない。視線をずらせばそこには。

「灯華」

「…総士」

少しだけ気まずい空気が流れた。それを打ち消したくて、灯華は自分の隣をぽんぽんと叩きそこに座るように促すと総士は素直に従い座った。そこから2人、要家の庭をそしてその向こうにある――
「海を見ているのか」

総士の言葉に小さく頷いた。高台にある要家からは庭先から綺麗に海が見える。

「体調はどうだ？」

「もう、大丈夫」

熱を出したただけだったので、次の日には殆ど回復していたが動きたくなって、現実を見たくなくてずるずると咲良の傍に居た。ここ数日澄美も何も言わなかった事から目こぼしをしてきていたのだろうが、総士が来た。それはこんなモラトリアムはもう過ぎせないという事なのだろう。

「次のパイロットを選出する」

それは、A l v i s の判断なのだろう。

「もう僕達には時間が無い。司令部もそう判断し、選定作業に入ろうとしている。だから、灯華戻ってくれ」

ああ

「もう、一騎は居ないものとするしかないんだ」

一騎が居ない。帰って来ない。灯華の傍から居なくなってしまった。

ぼたり、ぼたり。音を立てて止まらない涙が頬をつたい膝上で組む手に落ちる。それに驚いたらしい総士が目に見えてうろたえているのが、少しおかしい。

「一騎は、帰ってこないの？」

「司令部も、僕も、そう判断した」

「悲しいな。寂しいな」

でも嘆いても彼は帰って来ない。昔、泣いている灯華を宥めるのは総士や咲良だったが涙を止めるのはいつもいつも一騎だった。傍に居ない一騎を求めて泣く灯華を笑顔にするのはいつも一騎の役目だった。灯華にとって一騎は誰よりも特別な存在であることは誰に

も明らかで、一騎も灯華を何より大切に扱っていた。だからこそ灯華は一騎を戦いに狩り出す事を心苦しく思い、一騎は灯華がいるからとファフナーに乗り続けた。それは総士も同じだった。同化をしたいと思います程大切に思っていた友人が、島を自分をそして灯華を捨て出ていった事に落胆し激怒し、そして諦念を思った。だからもう、早く灯華にも諦めて欲しかった。一騎という存在を。

「僕が、」

未だ海か目をそらさない灯華の邪魔をするように目の前に立つ。すると灯華が総士を見上げ、それに総士は少し充足した。

「僕らは、ずっとここに居る。この島に居る」

「そう、し」

「僕らは、絶対にどこにも——いかないんだ」

僕が、そう言いかけたのは心の奥底に押し込めている言葉が漏れたのだろうが寸前で留める事ができた。だが、言葉は止められても伸ばした腕は言う事を聞かず座る灯華から海が見えないように負いかぶさるように抱きしめた。ゆつくりと自分の背に伸ばされた腕が総士の服を握っている。

「僕らは竜宮島に居るんだ」

その2人の様子を伺っていた咲良は声をかけずに静かに後にした。総士を案内した手前少し離れた場所で伺っていたが、立ち入れない2人の間に離れる事しかできなかった。

〇

咲良に続き、剣司と衛もファフナーに乗る事が正式に決定した。シナジエティックコードの形成値は他の訓練生徒に比べ良かったのだが、彼らもまた咲良と同様に変性意識の影響が非常に良く出ていた。剣司は臆病に、衛は正義漢に。特に衛に至ってはゴウバインという彼のためだけのヒーロー仮面を装着してファフナーに搭乗するものだから総士が何度も苦い顔をしている。だがそれで衛が心の安定を図っているものだから反対しようにも反対できない。確かに非常に、やかましいものだがそれがどこかコミカルで一騎がない暗さを薄めてくれるようだ。戦いながらもどこか平穏な日は2日と持たな

かった。ある一機の有人機が竜宮島上空を通ったのだ。それはこれまでも幾度かあった事で、何もなければそのまま通りすぎる存在だった。だが、今回は違った。その機体からある電波が発せられていた。「この映像は人類軍の勇敢なる広報担当者により全世界に配信されている」

史彦の命令で受信した電波の映像は初老の女性、ヘスター・ギャロップの力強い演説からはじまった。彼らは人類軍を鼓舞するため、この行動をしているらしいが、そこで流される映像は人類軍ではなく、竜宮島のファフナー部隊がフェストウムをなぎ倒してゆくものだった。

「人のもの勝手に使って、何やってんだか」

映像を見た総ての人の言葉を代弁した溝口の言葉に皆が頷いた。

「でも、あれを見たら大勢の人がフェストウムに勝てる気になるのは確かですね」

弓子の危機感を持った言葉にもうなずけた。まだ一機しか奪取していないファフナーをこのように大々的に報じているのはマークエルフを解析し彼らなりの類似機体を作れるという自信の表れか、それとも更に機体を奪いにゆくという竜宮島への警告なのか。

どちらにせよ、

「これではつきりしたな。一騎は人類軍に居る。案外素直に協力しているのかもしれない」

「世界の救世主になるつもりだったりしてなあ」

史彦に対する溝口なりの軽口だった。だが、友人の1人として彼女は黙っていなかった。

「違いますっ!!」

「ん・・・?」

メイモニターの下、CDCから急に声があがった。覗き込むと真矢が泣きそうな声で必死に叫んでいた。

「一騎君はあんな風に見られるのが嫌だから島を出てったんです!! ファフナーに乗る前の自分を誰かに覚えて欲しくて!!・・・なのに、誰も一騎君の気持ちを聞かなかったくせに!!なんで、皆そんな勝手な

事ばかり言うんですか？」

誰にも口を挟ませない勢いで真矢は一気に叫んだ。誰も聞いてあげなかった一騎の思いを。それを聞いていた誰もが返す言葉を見つけれなかった。それは総士も灯華も同じだった。

「——でいいか？」

「っ……あ、ごめん聞いてなかった」

「……またか。少し休憩しよう」

Alvisにある総士の部屋で今後の戦闘について灯華と総士2人で顔を付き合わせて話し合っていた。

最後の戦闘から2日。パイロット達には久しぶりの休息となったが、戦闘時に司令部を勤める2人にはこの間に作戦指揮の確認をしておこうと思っていたが、数時間前の真矢の言葉のせいか灯華は何度も意識を飛ばし上の空になっている。

「ほら」

「あ、ありがとう」

部屋に置いてあったドリンクボトルを灯華に渡すと素直にそれに口をつけた。

「さっきの遠見の言葉を気にしているのか？」

「気にならないって言ったら嘘になるよ。なんか、もうぐさつと」

座っていた椅子の背に思い切り体重をかけてよりかかると

「私、一騎が出ていった事だけが悲しかった。それだけだったの。悲しくて寂しくて、ちっとも一騎の事考えてなかった」

「それは、」

「なんで一騎がこの島から出ていったのか。何を思っていたのか。全然考えようとしてなかった。あれだけ傍に居たのに……ああ、悔しいなあ。真矢にはわかったのに」

「遠見の能力だろうな」

「うん。でも悔しい。一騎の事、分かってたつもり、だったんだねえ」

灯華の一騎に対する言葉はそのまま総士を傷付けると分かっているでも止める事はできなかった。一騎がどれだけ必要としても大切にしてなかったのだと、真矢に言葉で突きつけられた。

「それは、僕もだ」

「ごめん。ちよつと意地悪な事言いすぎた」

「いや。僕たちは確かに傲慢だったんだろうな」

家族だ、友人だと口では言い、そのくせシステムという機械的なモノで繋がっているから大丈夫だと無意識な部分で思っていたのだ。ジークフリードシステムというモノでつながっていたとしてもそれは戦闘中のこと。普段は何を感じ、何を思い、どう行動するのかなど——顔を合わせなければ、話さなければ、分かりあわなければ、分かり合おうとしなければ分からないものだ。と漸く子供たちは気づけたのだ。

「会いたいなあ一騎に会いたいよ」

素直な灯華の言葉に総士は自分のボトルをぎゅつと握り締めた。こんなに彼女が無防備に素直な言葉を紡ぐのははじめて見るものだった。それだけ一騎の出奔が堪えているのだろう。それは自分も同じだと、自嘲しここは彼女に倣って素直な言葉を吐き出した。

「……そうだな」

そんな2人の素直な言葉が聞いたのか、次の日事態がまた大きく動いた。もう使用不可能だと思われていた衛星回線から出処不明な映像が全世界に配信されてきたのだ。それは前日とは違い、苦戦を強いられている新国連のモルドバ基地の姿だった。

「かつて無い事だが。．．．奴等なりの情報戦かもしれん」

奴等がフェストウムをさしているのだと瞬時にわかった者が一体どれだけいただろうか。フェストウムとはケイ素生命体、乱暴にいえば土からできた泥人形なのだ。はじめは海中での戦闘すらできなかった存在が情報というものを理解し、それを利用するまでになったとは理解し難い。しかもそれを何故行うのか、ということ突き詰めてみれば、

「ばかな、奴等が俺達の感情を理解しているっていうのか？」

溝口の言葉通りという事となる。

その間も映像は尚も大量のフェストウムに襲われる新国連の基地を流し続ける。それに混じってフェストウム達と交戦する新国連の

ファフナーも映し出されるも、すぐに破壊されてしまっている。だが、一機動きが異なるものがあつた。しばらくその映像を見ているうちに灯華は自分の目がおかしくなつたのかと思つてしまった。脳裏に浮かぶ動きと重なるのだ。

「か、すぎぎ?」

期せず、総士と言葉が重なつた。

「間違いありません。あの動きは一騎です!!」

「二人がそう言うなら間違いねえなあ」

「だったら助けに行かないきゃ!!」

下部にあるCDCから今日もまた真矢の声が響いてくる。なんだか毎日真矢に怒られているなあと思つてしまった。

「あれが一騎だという保障はない」

「灯華、皆城君!!あそこに一騎君が居るんでしょう?助けに行こうよ」

真矢の叫びに冷静に返す史彦。しかし真矢はそんな史彦を気にせず灯華と総士に向かつて叫ぶ。慌てて弓子が真矢を宥めようとするが、それでも真矢は叫び続ける。

「何か出来るんでしょう?2人なら何か出来るんでしょう!」

弓子が後ろから肩を揺すり真矢を止めようとするが一向に真矢は口を閉じようとはしない。それどころか一層声を荒げて灯華と総士に問いかける。

「無理だ」

「あんな場所にファフナーを出撃させるなんてできない。モルドバは……遠すぎる」

そんな真矢に灯華と総士は力なく“できない”としか答える事しかできない。

「誰も行かないんだつたら、あたしが行く!!ここで何もしなかつたら翔子に悪いもの」

真矢は体を揺すり弓子の腕から逃れ、そう宣言するように一際声を大きくして叫ぶ。それだけ強い意志が真矢にはあつた。

「翔子が行つたよ、戦つたよ。一騎君のために。皆の為に。……何であたしが行つちや行けないの!」

「真矢・・・一騎一人の為に、島を危険には晒せないの!!」

灯華はそんな真矢の叫びを聞いて思わず叫んだ。目の前にある機械に手を付き、身を乗り出し真矢の方を向きながら。

「そんな・・・どうして・・・」

真矢は落胆した様子を全身で表しながら灯華を見るとその目から涙をあふれさせていたがそれを気にすることなく灯華は叫んだ。

「行きたい。私たちも行きたい。でも、今フアフナーを出してしまつたら島を守れない。皆を、守れないの」

灯華はそんな自分の様子に気付いていないかのように更に身を乗り出して真矢に叫ぶ

あまりにも身を乗り出し落ちそうになっているので、総士は後ろからその身を引つ張り立たせた。しばらく沈黙が続いたが、それを破つたのはこのような空気を苦手とする、溝口だった。

「あーそーいやあここんとこずっと働き詰めで休暇が大分残つてたなあ。今からしばらく第3待機にさせてもらうぜ」

「待て。何処へ行く?」

史彦の間に溝口は簡潔にモルドバだ、と答えた。それを皆が反対するも溝口は我関せずひょうひょうと部屋から出る素振りさせ、あまつ真矢と一緒に行くかと問いかけた。それに間髪いれず真矢は頷いた。

「私、行きます」

気が変わらぬうちに、溝口と真矢は数時間のうちに竜宮島から飛び立ってしまった。モルドバまで高速機を使つて半日強の距離だが、それは軍人の溝口だけの時で真矢が同乗するとなればもう少しかかるだろうという目算だ。小さくなる機体を見送りながら隣に立つ総士に灯華は話しかけた。

「また、真矢に先を越されちゃった」

「だが、僕たちはこの島を離れられない」

「うん」

「だから溝口さんと遠見と、一騎を待とう」

「うん」

彼らが帰ってくる場所で、待とう。

いつかのそら07

溝口と真矢の乗った機体が偽装鏡面を越えようかという頃、灯華の感覚に紗が覆いかぶさり全てのものが鈍く感じられるようになった。自分自身が虚ろになりそうだと思う反面、どこか奇妙に郷愁を覚えるものだった。

「海底から接近する物体有り。6時方向、距離400」

「ソロモンに反応あり——ザインです！」

急いで戻ったAlvisのCDCから齎される緊急事態の警告も、その後慌ただしく動きを始める司令室を眺めるも映像だけで緊迫感はずななぜか伝わらない。事実のみを感じ取り、データを読み取り、恐ろしいまでに冴え渡る頭でメインスクリーンに映し出される情報の解析をはじめた。相手は新国連。狙いはコアとフェストウムと島そのもの。彼らにとつてフェストウムとまともに戦える戦力はなんとしても「奪取」すべきものなのだ。そう結論付けるまで恐らくコンマ1秒もかからなかっただろう。

「潜水艦からミサイル発射!!」

「——すぐに、ノルンが出るよ」

真矢たちが乗った小さな機体は歓迎しない客から狙われたようだが、それよりも前に迎撃用無人小型機が寸で全てを撃墜。次発のミサイルを打たないところから、ついでで撃つただけなのだろう。新国連の潜水艦を示す点は刻々と近づいている。焦れる総士がファフナーの出撃を直訴するも史彦に即却下されている。

「君たちを、人間と戦わせるわけにはいかん！」

その間にも何故か第2ヴェルシールドを無効化され防壁が何もない状態に陥り総士が更に強く戦闘を求めるも史彦は最後まで人と戦う事を許可しなかった。そのせいか新国連側は着々と戦力を竜宮島へと上陸させてゆく。どうしよう、どうしようか。そう問いかけると応えが帰ってきた。

——じゃあ一緒に見てみよう。

耳の奥で天の岩戸の開く音が木霊した。

竜宮島が反撃をしてこないと判断した新国連は上陸作戦を執行し Alvis 内にも侵入を開始したようだ。史彦が CDC 内のスタッフも島民のようにシエルターに逃げ込むようにと告げるも大人2人と総士はこの場に残ると譲らなかつた。何も殺戮までは新国連側も考えていないだろうと史彦は判断しそれに沈黙を持って答え、階下の弓子と灯華たちの後輩の理奈にはシエルターに向かうことになった。

「灯華はどうする?……灯華?」

「……私はここから出るよ」

ややのんびりした灯華の返事にどこか妙だと感じ取った総士はそのまま頷き背後の扉から出ていく灯華を見送った。

司令室から時折会話をしながらのんびりと目的地を目指した。

「何を着たの?」

——服大きいよ。

——おかあさん。はじめての言葉。

「早くお話したいね」

「誰といるの?」

——芹ちゃんは虫が好きなんだって

——ねえ、景色を見たことあるの。

「美しいと思うよ」

1人迷路のような Alvis 内を新国連の兵士と全く会うことなく上へ下へと足を運び安全な通路を進む。どの道を通れば良いのか彼女が教えてくれるのでのんびりと時折休憩を挟みながら歩みは止めない。時折交わす短いやり取りは傍からみれば灯華の小さな独り言。それがわかつたとしても灯華と彼女のそのやりとりは2人以外からすれば噛み合わないものに首をかしげただろう。他の人が聞けば言葉が足りないと思うだろう。だが彼女たちには支障がなかった。言葉にせずとも、何を共有せずとも全てを分かりあえる存在となっていた。

Alvisの出口から外に出ると空には夕焼けが広がりだしていた。思った以上にAlvis内を抜けるのに時間がかかってしまったようだ。時折聞こえる爆発音にどうやらフェストウムが襲来したらしいと検討をつけると彼女から正解と答えがかえってきた。じゃあどこに向かおうかと聞けばここから反対側になる灯台に行こうと提案され灯華もそこへと向かう子にした。島の中の住宅街はしんと静まり返っていた。そういえば戦闘中に島内を歩き回ることは初めてだったな、と自宅の前を通り過ぎながら思った。誰もいない街中をゆっくりゆつくり歩き、しばらくしたら島をぐるりと周る道路へと出た。戦闘とは反対側に向かうためか段々と爆撃音が小さくなってきた。完全に日が落ちて薄墨が空を覆う頃灯華は灯台の元へたどり着いた。聞けば彼女はまだ時間がかかるようなので灯台の入口にこしかけ空を見上げた。本物の空。それを初めて目にしたのは灯華が岩戸から取り出されてからだだった。

8

フェストウムと人間の独立融合個体を島のコアに、としたのは偶然と必然が重なったものだった。妊娠中の母体が研究中だった瀬戸内海ミールにより同化させられ胎内の子は半同化のまま成長する。母体は死を迎えることなく点滴により延命、その後人工的に子供は産まれることとなった。半同化されていることからその子は延命できるのか成長できるのか分からないままの誕生だった。以後のためにその子は経過観察という名の研究が行なわれる予定であったが、その子は産まれて数時間もしないうちに忽然と部屋から消え去った。何人もの職員や研究者、医師が居る前での出来ごとだった。総出で探し出した結果その子が居た場所は最終段階に入っていたとはいえず、当時開発途中だった後にワルクューレの岩戸と名付けられる機械の中だった。誰が何のために、見つけた職員が取り出そうとするもそれは意思を持つように拒まれ岩戸が開く事はなかった。直後その子の母体である母親の真壁灯里が息を引き取った事もあり、非科学的ながらも灯

里の意思が働いたのではないかと誰かが口にしたためこの子、灯華はワルキューレの岩戸の中に居ることを了承された。

だがそれは心情からの配慮のためではなく、灯華が岩戸の中に居る事でシステム全体の動きが安定化されたからに過ぎない。灯華が同化するに至った瀬戸内海ミールは島に利用されているミールの元となるもの。そのため何らかの力が働いたのだらうと結論が出ないまま彼女はしばらくのあいだ岩戸のなかで過ごしていた。それが動いたのは、彼女が誕生して3年がたとうかという時だった。もし普通に生まれていれば言葉を発し、他との区別が生まれ、自我が発達しだす頃だった。

——だあれ？

だあれ？

——一騎

かずき？

——あそぼう

あそぼう

当時、真壁史彦は妻の紅音を亡くしたばかりで慣れぬ子育てを一人で必死に行いながら日々を過ごしていた。同時期しばらく風いであたミールの状態が急に不安定になり、結果友人の皆城梢が暴走したミールに同化され胎内にいた子も人工子宮に入れられるという騒動が起こっていたため、自分の息子が見えないお友達と楽しげに会話をしていたのを彼は気づいていなかった。

——おなまえなあに？

なまえ？

——おしえておしえて

おなまえ……

——おなまえ知らない？

知らない

その日、誰もいない情報管理区画のパソコンモニターが勝手に起動をはじめた。誰もおらず何も触らないはずなのに、どんとどんと情報がモニター上を流れてゆく。人の認識が追いつかない速度で流れる情報がピタリと止まった。それはA l v i s内でもある一定の許可を持つものだけが閲覧できる機密情報。それが表示されたのち画面はブラックアウトを起こしそれまでと何も変わらない静かな部屋へと戻った。

ねえ

——なあに？

おなまえわかった

——おしえて！

灯華

——灯華あそばさう！

夜間急遽呼び出された史彦と公蔵はワルキューレの岩戸の前で1人佇む千鶴の傍に駆け寄った。

「岩戸が開きました」

そう伝えた千鶴の腕の中にはあたりを興味深くきよろきよろと見回す灯華が抱かれていた。以降更に落ち着きをなくしたミールの状況に誰かがイチかバチかだ、と公蔵に彼と梢の娘を岩戸へ向かわせてみては、と提案した。その案にだれよりも激怒したのは史彦だったが公蔵はその案を受け入れ娘をワルキューレの岩戸へと沈めた。すると次第にミールは落ち着きを取り戻すも、以降ブリュンヒルデシステムをはじめとする幾つかの機能は彼女と共に眠りにつく事となった。

∞

古い記憶に思いを馳せながらA l v i s内の出来ごとを把握してゆく。総士はウルドの泉へと向かいもう一度ジークフリードシステ

ムに乗る事を決めた。史彦たちは開放された第二CDCへと向かい人間ではなくフェストウムとのみ戦う事を望んだ。皆が選んだことを教えてあげなければならぬ。

「灯華ちゃん、何故ここに」

閉じていた目をあければ千鶴と一人の少女。ところどころシャツに泥がついているのは彼女曰くの泥遊びのせいだろう。ヘルメットをその場に落とし彼女は灯華の目の前に立ち両手を差し出すのでその手に合わせるように灯華も手を差し出し指を絡めた。

「はじめまして灯華」

「はじめまして乙姫ちゃん」

途端奇妙な程霞んでいた己を急速に取り戻した事で乙姫が灯華を切り離してくれた事がわかった。

「私一人で大丈夫だよ」

「でも心配だから一緒に行くよ」

「わかった。千鶴は戻って。シエルターはまだ安全だから。ここまで一緒に来てくれてありがとう」

2人で向かうのは何も怖くなかった。だが千鶴は意に反して、

「私も行くわ。システムの研究者として…いえ、島に住む人間として見届けたいの」

と告げた。だがその言葉に満足そうに乙姫は頷いたので千鶴を含めた3人で灯台の上に登っていった。乙姫はこの島で唯一の、灯華は島の中では稀有な存在。それはこの竜宮島というものを構成するために切り離せないものだった。大人の勝手な行動で幼い子供を犠牲に成り立つ島に幾人もが疑念を呈した。その言葉を放ちながらも誰も手を打たなかった。それが大人たちの真意を表していると千鶴は懺悔するも乙姫は笑った。

「私は選んだの。心を持つという事を。それが私の…うん、私たちの選択」

選んだのだ。灯華は彼に名を呼ばれる事で、乙姫はこの島を見つめ続けた事で。2人は母親の胎内に居る時に半同化された状況を生き抜いた、体の構造は人間に似ているも構成されるものは似て非なるも

の。フェストウムに非常に似た存在——島の人間はそれをコア型、もしくはコアと呼ぶ。そう人ではない者が人の心を持つ事に決めた。「わたしたちは、ここにいますよ」

乙姫と灯華は手を繋いで海の先に表れたフェストウムを見る。もう彼女の考えている事は分からない。ふ、と乙姫が此方を向いて笑った。

「歌おう」

歌いだしたのは乙姫からだ。岩戸の中で覚えた歌は少し聞いたら思い出し灯華の口をついて出てきた。この歌は誰が教えたのか誰が歌っていたのか、灯華も乙姫も何も知らない。もしかしたら遠いフェストウムの歌なのかもしれないと滑稽な考えすら浮かぶほど神秘的な旋律が体から溢れ出す。

「総士が怒ってる」

「どうして?」

「灯華がここにいる事が理解できないみたい」

「総士には外に出るって伝えただけだなあ」

「後で謝ろっか」

「そうだね」

2人でくすくすと笑っている間に先程のフェストウムが段々段々と近づいてくる。やはり見れば見るほど美しい存在。恐怖を覚える美しい存在が目前にやってきたため、灯華は乙姫の手を強く握った。乙姫はミールを通して目の前のフェストウムとそのミールに問いかけているようだ。だが乙姫の言葉は彼らには受け入れられなかったようで、フェストウムは目を見開いた。

「逃げるのよ乙姫ちゃん灯華ちゃん」

千鶴が灯華と乙姫の前に立ち逃げるように促すも乙姫は動こうとしない。でもねだいじょうぶだから、と乙姫は小さく呟いた。

もう灯華と乙姫、そしてミールは繋がっておらず本来なら分からないはずだった。しかしその存在が近づいてくる度に増してゆく感覚。ああ、彼が帰ってくるのだと全身が喜びを感じる。

「おかえり」

「おかえり一騎」

目の前のフェストウムが急に表れた見慣れぬファフナーによって殴り飛ばされた。今まで歯が立たなかつた攻撃がおどろくほど通じ敵のコアまでも吸収してしまった。あんなに吸収して大丈夫だろうかと心配はすれど不安はない。彼は彼のための剣を手に入れ選んだのだ。この島を、総士を。総士の痛みを気持ちに分かるために一騎は総士と話をする事を選んだのだろう。それを知った総士が泣いちやつたね、と乙姫が面白そうに笑うのをみながら少し寂しかった。

一騎と総士、どちらにそれを感じたのか。それとも両方か。

いつかのそら08

「さ、灯華ちゃんもお風呂入ってきなさい。私は乙姫ちゃんを入れてくるから」

「後でね、灯華」

「うん。後でね乙姫ちゃん」

ひとしきりの戦闘の後に灯華と乙姫は千鶴に連れられAivis内へと戻った。乙姫は水溜りに入った汚れを落としに、灯華は長い間外にいたせいで冷え切った体を温めるためそれぞれのバスルームへと直行させられた。まだ上手く体が動かない乙姫は千鶴と一緒にお風呂に入るらしい。灯華は自分に宛がわれている部屋へと入り制服を脱ぎバスルームへと向かう。バスタブに湯が貯まるのを待つ時間が惜しいとばかりにシャワーを全開に熱いお湯を頭からかぶる。

色々な事がありすぎた一日だった。

新国連が島を占拠し、乙姫が目覚め、フェストウムが島を襲い、一騎が帰り、灯華は……。流れる湯に揺らぐ視界の中、自分の手のひらに見える緑色は事実か虚像か。一度目を瞑り視界をクリアにするともうそれはなくなっていた。だいぶ湯がバスタブにたまってきたため腰を下ろすも上からかかるシャワーはそのままにしておいた。

バスルームから出て時間を確認すると意外なほど長く籠っていたらしい。特に急ぎの予定はないが、戦闘の様子や情報を貰おうと新しい制服をロッカーから取り出した。自室から廊下に出ると所々で聞きなれた怒鳴り声が聞こえるも、新国連の兵士の姿は一切見当たらない。自分の戦艦にでも退避したのだろうか。いつもの道筋を辿り仮眠室の前まで来ると総士と乙姫の声が聞こえた。はじめての兄妹の語らいを邪魔していいものか迷い、灯華は入り口で立ち止まった

「…これは夢だよ」

「夢?」

「世界をこの目で見て、この手で触れたい。そういう夢が叶ったの」「何でも望通りにしよう」

妹の言葉に兄は限りない優しい声で応えていた。

「家族皆で、暮らしたいな」

「…っ」

「安心して。只の我侂だから。そういう時はお兄さんらしく無理だつて言っつていいんだよ、総士」

「ああ」

どこか余所余所しい、けれど互いに情が聞き取れる会話に灯華は小さく安堵した。彼等が兄妹として過ごせない一旦を担っていた身としては総士と乙姫がこんな風に会話ができることはとても喜ばしい。

「灯華、入ってきてもいいよ」

灯華は仮眠室の中からかかった声に苦笑しながら姿を見せることにした。総士は表情を崩さず、乙姫は笑顔を湛え手招きをして向かえてくれた。

「ごめんね、立ち聞きしちゃった」

「灯華だから大丈夫」

「ありがとう」

乙姫が飲みたいというジュースを選んであげ、それを手にしたままメデイカルルームへと向かった。中に入る寸前、自動的に扉がひらき中から真矢が出てきた。どこか疲れた顔をしているのは長旅もあるが母親に怒られでもしたのでだろう。

「お疲れさま。おかえり真矢」

「ただいま…長かった…」

「皆心配していたんだからしょうがないよ」

げっそりとした顔で俯いた真矢はそこで見慣れぬ顔に気づいたらしい。

「はじめまして真矢」

満面の笑みで挨拶をしてきたのだが、一体誰だろうと聞く前に彼女はさらに言葉を重ねた。

「ねえ、千鶴は中？」

自然な様子で出された名前が自分の母親の名前だと気づくまでに少し時間がかかってしまったがうん、と肯定すると女の子は自分の傍を通り抜けて入っつていっつてしまった。

「遠見先生―私もですか?」

「灯華ちゃんは明日の朝でいいかしら?」

「はい。了解です」

灯華が扉付近から声をかけると中から返事が返ってきた。灯華も時折健康診断を受けているらしいからその算段なのだろうと検討がついた。

「いまの子・・・誰?」

「皆城乙姫。僕の妹だ」

「皆城君の妹...?」

知らない女の子の名前が乙姫だとはじめて知った。その存在もはじめて知った。ずっとこの島で暮らしてきていたがそんな名前の女の子の存在など一度も聞いたことがなかった。詳しく聞きたいがそれを総士ははぐらかしてしまった。まるで部外者は立ち入って欲しくないものだといわんばかりだが、事実そうなのだろう。灯華をつけて総士はその場を立ち去っていった。

「ちよつと冷たかったんじゃない?」

「事実だ。遠見は、昔の事を知らない。まだ、そこまで開放されていない」

子供達、特にファフナー搭乗者に対するメモリージングの開放は他の子供に比べればその開放レベルは高いものとなっている。それはCDCに配属された真矢も同じレベルまで引き上げられたが、総士や灯華の様に全てを開放された分けではない。Alvisの成り立ちやAlvis最深部の構造など全員が知る必要でないものは大人でも解放されていない者もいる。その開放されていない部分に乙姫として灯華の過去も含まれるため総士は知らなくて良い事だと真矢を突き放したのだ。

「いつかは、知るよ」

「だがそれは乙姫とAlvisが判断することだ」

「そっか」

Alvis内のエレベーターの中に入り移動階のボタンに触れるところで灯華は総士に提案した。

「一騎に会う？」

すると総士は戸惑った顔をした。すでにシステムを介して再会しているというのに何を遠慮しているのだろう、と思っただけでない。緊張しているのだと、繋いだ冷たい手を引っ張りながら気づいた。なまじシステムを介してしまったために生身でどう対峙したら良いのかが分からないのだろう。

「大丈夫。一騎が帰ってきてくれたの。いっぱいお話し、しよう」

「…明日でも」

「そうやってずるずるしたら絶対できないよ。大丈夫一騎だよ。一騎だから大丈夫」

止まりそうになる足を止めないために総士の手を引き一騎の入っている独房の前で放した。灯華も一騎に会いたい。だが今は二人で話すべきだろう、と断腸の思いでその場を離れてA l v i s内の自分の部屋に戻った。

「気になる会いたい気になる…一騎い…」

と、ベッドの上でどれぐらいごろごろしているだろう。総士にはものすごく物分りの良い事を言ったのだが本音は一騎に会いたい。会って触って話して一騎が帰ってきた事を実感したいと心底思っていたのをぐっと我慢。自室に戻ってから会いたい会いたいと愚痴愚痴していたのだ。明日の朝突撃しようかと思っただが、起床後すぐにメイカルルームに来るようにと千鶴からの通達が来たのでそれもできない。

「会いたいよー一騎い」

それからもごろごろとベッドの上で転がっていたのだが飽きた。既に湯も浴び、後は寝るだけなのだが神経が高ぶっているせいか睡魔が来ない。乙姫と竜宮島と唐突に繋がり、今は離れ、一騎が帰ってくるといふ強制イベントに体は疲れきっているはずなのに制服を脱ぎ寛げる部屋着に着替えた。物語でも読もうかと情報端末を手にしベッドの上に座ろうとしたところで来訪者を告げるブザーが鳴った。特に確認する間もなくロックを解除し扉を開けるとそこには総士が

立っていた。

「すまない、寝ていたか？」

「ううん。眠くなかったから起きてたよ」

「入ってもいいか？」

「いーよいーよ」

何か飲むかな、とベッドから立ち上あがろうとしたのだがその前に総士が立った。ん、と見上げると天井の電灯が眩しく表情が見えない。目を細めたところで総士がベッドに登ってきた。

「どうしたの？」

「…」

「総士？」

只々無言で総士はゆつくりと動き灯華を抱きしめた。体重をかけられ自分より上背がある人を支えきれはるはずもなくずると体制は崩れベッドの上で二人重なる形になった。ごそごとと総士は少しだけ動き下着を着けていない胸元に顔を摺り寄せてきた。これはそういう流れなのかな、と思ったが総士はそれ以上動きをみせない。

「制服きつくくない？」

「疲れた？」

「もう寝る？」

全ての問いに頭を横に振るだけで何も答えない。その振動でなにやら妙な気分になるのだがしがみついた総士は離れてくれない。一体どんな表情をしているのやらだ。

「…一騎が」

その名前を出したところで総士の体が少しだけ、撥ねた。

「一騎が帰ってきて嬉しいね。沢山お話し、できるね」

腕を動かし総士の頭を抱えるように軽く抱きしめると総士がしがみついてくる力が強まった。そのまま互いの体温を感じていると急に睡魔がやってきた。このまま寝てしまうと風邪でも引いてしまいそうだがその心地よいぬくもりには適わず瞼を閉じた。

次の日の朝、灯華は指示通りにメデイカルルームで一通りチェック

を受けあとは問診だけになったところで緊急指令が入った。メデイカルルームからクリエムヒルドへの入り口が近かった事が幸いしてか一騎がフアフナーに乗る前にスタンバイをする事ができた。

「マークザインってどんな感じだった？」

『特にマークエルフと変わらない。機体は違うようだが、同じ一騎だ』
「同化現象の塊って聞いてたけど同じなんだ」

先にジークフリードシステムの総士とクロツシングをして一騎を待っているのだが、その間も総士はシステムを介してカノンに奪われた戦艦のフェンリルの操作を奪取しようとするようにデータを構築しているようだ。その辺りは灯華には門外漢、言ってしまうえば戦闘以外は特に役にたてないので静かにその時を待つ。

「あ、一騎だ」

『先にクロツシングしてくれ』
「了解」

一騎がマークザインに乗り込んだ情報が目前に表示されたのでクロツシングシステムを起動させた。総士から同じだ、と聞いているものはじめての機体。不安も少し混じる。

「対象マークザイン。クロツシング開始」

機体データはあらかじめ登録されているためシステムは順調に灯華と一騎を、クリエムヒルドとマークザインをクロスさせた。

「一騎、聞こえる？」

いつものように言葉をかけるとあわてたような一騎の様子が分かった。自分では感じられないがどこかおかしい所があるのだろうか。数値を見直すもどこもおかしくない。容子からも通達が来ないはずなのにと首を傾げているとやっと一騎から返答があった。

「灯華、ちかい」

ちかい。その一言が全てを言い含めていた

『どうした?』

「総士、変。おかしくないのにおかしいの」

『おかしい?』

「どうしてこんなに一騎がちかいの」

『灯華?』

「言葉が気配が…全部、ちかい」

「こんなにちかいなんて、どうして」

「これじゃ、ちかすぎる」

『灯華! クリエムヒルドとマークザインを切れ!』

「いや、一騎がそこにいるのに。離れたく、ない」

『っ、クリエムヒルド強制停止、続いてシステム搭乗者を強制退出』

「やだ、やだ…やめて1人にしないで」

『羽佐間先生、遠見先生。灯華をお願いします。僕だけで一騎と共に
行きます』

「やめてまた1人はいやなの」

灯華の懇願を無視しクリエムヒルドは音を立てて止まった。一騎と繋がっていた感覚は全て霧散した。漸く1人になったのだが、千鶴や容子が駆けつけるまでそこでうずくまって1人泣きじやくっていた。あの一騎が1人出奔してしまった日のように。

そのまま戦闘に戻るはずもなく灯華は朝訪れていたメデイカルルームにとんぼ返りをしてベッドに横たわっていた。クリエムヒルドから降りた直後の寂しさは薄れてゆくも自然と流れる涙は止まってくれない。一騎が居なかった日々は思った以上に堪えていたところに不自然なクロツシングで籐が外れてしまったようだ。

「大丈夫か?」

「うん」

「もうすぐ、一騎が来る」

「うん」

カノンの説得をうまく終えたらしく思った以上にはやく総士はメ

デイカルルームに顔を出した。灯華の頬を流れる涙を指でぬぐってやっているが、なかなか止まる様子はない。早く一騎が来てくれないかと思っていると入り口近くで声がした。一騎が来た、それを言う前に灯華はベッドから勢い良く起き上がり声の方向へと裸足で走り出した。

「うわっ、いてっ」

一騎のあわてた声とどきっという音。総士がベッドを仕切るカーテンから顔をのぞかせると尻餅をついた一騎としがみ付き泣く灯華。

「泣くなよ灯華」

「ばかばかばかばかー。なんで出て行ったのよー」

「ごめん」

「私もごめんー。一騎が悩んでるのも知ってたけど何もいえなかった」

「今なら分かるよ。でもあの時、灯華に相談する事さえ思いつかなかった俺が悪い。灯華を1人にしちやっとな。…ただいま」

灯華の頭を撫でながら優しい声で慰める一騎。今までと同じ、昔から変わらない光景。戻ってきた日常だったが、それをみる総士の顔は今までとは違いどこか固い。灯華と一騎は育ってきた境遇からか互いが互いを慈しんでいることが分かる。子供時分は仲が良いなとか思わなかったが、ここ最近はその感情を揺らがせる事ばかりだ。有り大抵に言えば憎気、嫉妬をしているのだろう。だがそれを表にだせるほど総士は素直ではないが、隠しきれないほど大人ではない。

「一騎、灯華そこじや邪魔になる」

「良いのよ総士くん。別に…」

「いえ、もう大丈夫です。部屋に戻るぞ」

千鶴の言葉に勝手に返事をして2人を引きずるようにメデイカルルームを出た。

その晩、灯華の部屋に総士が向かったのを知っているのは乙姫だけだった。

いつかのそら09

新国連のフェンリル事件より3日、カノンと乙姫は同日中学校へと編入される事になった。乙姫は嬉しそうに、カノンは困惑の表情で。相対する顔で指示を受けていたのが印象的だった。島の子供達には昨晚乙姫に関する情報公開が成された。知らぬ子がどこから現れたのか納得のできる説明が思いつけず、何より乙姫自身が隠す意思を見せなかったためだ。コアというモノを知識の上では知りながらもそれが何なのか分からない同級生達に頬をつつかれている乙姫を見かけて灯華は安堵した。

島の季節は盛夏を迎えるところだった。乙姫そしてカノンという新しいメンバーを受け入れるにあたって親睦会を開こうと言い出したのは咲良だった。海へ行こうと誘ってくれた咲良に涙を吞んで断りの返事をしてA l v i sの下位層へと向かう。半日前、時間を考えない新国連からの通信が入ってきた。相手はミツヒロ・バートランド。元島民であり、真矢の父親だった人だ。彼は苦手だった。誰よりも一途にフェストウムに力を注ぎ誰よりもフェストウムを憎んでいた。人間でもない、フェストウムに近い灯華は彼にとって実験動物以下の存在だと、当時の彼の目が物語っていた。なるべく顔を合わせないようにとA l v i sで避ける事はもちろん遠見家にもほとんど近づくことはなかった。ともかくその彼が島を訪れるという事が決定し、その前に隠さなければならぬ物を徹底的に隠すことになった。物質的なものは仕方が無いにしろ、データであればいくらでも隠すことができる。灯華が呼び出されたのだ。

「おじさーん早い早い。ちよつと待って！」

「まだまだあるぞ。灯華ちゃんがんばれ！」

「ひー！ほんつと人事！」

ファフナーブルクの前で小楯保と灯華は軽口を叩きながらデータの受け私を行っている。見られてはまずい、マークザインやクリエムヒルドの情報を乙姫に許可を貰いデータの最下層、ウルドの泉やコアの情報とって一部の権限を持つものだけがアクセスできる所に移

動していき元データは破棄。いまのところこの部分にアクセスできるのは史彦、保、総士、灯華そして西尾博士だけという嚴重なものだ。

「あと何分ですかー?」

「2時間つてとこだな」

「ぎゃー間に合うかなあ」

「間に合わせてくれよ!」

「えーん!私も海に行きたかったのにい!」

「この前の戦闘途中抜けたんだから穴埋めと思ってがんばれよ」

「小楯さんひどい!あれは総士が無理やり抜けさせたんですよ!」

前回の戦闘時、様子がおかしくなった灯華は強制的に排除され戦闘を抜けさせられた。その判断は間違っていなかったとは思いがこんな風に穴埋めをさせられるのは辛いものだ。

「そうそう。ミツヒロが帰ったらその検証も行うからな」

「えっ、いつですか?」

「帰り次第」

「明日ですか?」

「明日だな」

「・・・明日、学校ですよ」

「あきらめろ。あ、一騎君も呼んでおいてくれよ」

「・・・はい。」

2時間後、這這の体で終わらせる頃新国連の艦が近づいていることがアナウンスされた。保に共に出迎えるかと問われたが、灯華は疲労を理由に固辞し自室へと戻った。真壁の家に戻ろうかとも思ったが迂闊に出歩いて偶然、というのも避けたいためA l v i s 内に籠城する事を決めた。どうせ明日も朝からマークザインとのクロツシングの検証が行われるのだ。不貞寝でもしようかとベッドの上に飛び乗った。

しばらく情報端末で島内の新国連の動向を読んでいたのだがいつの間にか寝ていたらしい。

ふ、と乙姫から呼ばれた気がして目を覚ました。

「乙姫ちゃん?」

一時の恒常的なクロッシング状態は乙姫により解除されたはずなので乙姫の声も灯華の声も直接互いに届くはずがないのだが、声をかけてみた。返事はなくそれが当たり前なのだが、その代わりに壁面パネルが通信を告げるアラームを鳴らした。

「はい」

『僕だ』

「どうしたの?」

『面倒なことになった。出られるか?』

「いいけど。どこに行けば良い?」

『ウルドの泉へ。・・・礼服を着てきてくれ』

礼服とは名ばかりで、最近専ら葬儀服としてのみ活用していた白い制服を?と疑問に思ったが言われた通り着替えてウルドの泉へと向かった。もしかして誰かが亡くなったのだろうかと思ったがそれならばすぐに葬儀場へと向かうように言われるはずだ。エレベーターは灯華の権限で対地理禁止区画、キールブロックへ進み扉を開けた。そこには既に白の礼服を着た皆城兄弟が待っていた。

「一体何事?」

「話はまだ聞いてないのか?」

「何も。礼服なんて、誰かが亡くなったの?」

「査問委員会が開かれる。僕達もそれに出る」

「査問委員会に?」

子供達にはおおっぴらにできない事象を判断するための査問委員会。今までも幾度と行われ引越しという名の島外追放になった大人たちもいるが、今までそれに灯華や総士も関わった事はなく、後日詳細を知らされるのみ。出席したいと思ったことは一度もなかったのだが、一体何があったのか。

「時間がないから。灯華、手出して」

「ん?」

乙姫が差し出した手に右手を差し出すと指を絡め掌を合わせた。左手も、と言われたので差し出すと同じようになった。

「ちよつとかがんでくれる?」

身長差があるためか少し膝を曲げると額を合わせてきた。するとざつ、と音が鳴るように情報が脳に駆け巡った。乙姫が灯華のために知りうる情報を与えてくれたのだ。簡単な同化現象を応用したものだど教えてもらった。

「これ、他の人でもできるのかな？」

「無理だよ。私と灯華だからできるの」

「へえ、でも便利だね」

「・・・あらかたは知ったか？」

「あ、うん。遠見先生たちが査問委員会にかけられて・・・皆はそれを助けていのよね」

「ああ」

「それに乙姫ちゃんと私の名前を使いたい、と」

弓子のやった真矢の情報改竄は服務規程違反であり、重大な反逆行為とみなされ一過揃って島外追放という選択肢を選んでもなんら可笑しくないレベルのものである。それを弓子は知っていたか知らなかったかは分からないが、それほどのものを覆すにはコアである乙姫そして元コアであった灯華の名を出さねばならないものであった。この島そのものであり、時代によっては神にも等しい存在である乙姫が是といえれば全てが是となる。最終手段どころか禁じ手にも近いカードを灯華も含め2枚も切るといふ。

「真矢を守りたい？」

「彼女は貴重な戦力になりうる存在だ」

「分かった。じゃあ出る」

総士の返答は曖昧なものであったが灯華としても真矢を島外になど出させたくない。ましてやその思惑にミツヒロが関わっているなら尚更。苦汁を舐めさせられたこともある彼に一矢報いるのもまた一興と思うのは性格が悪いだろうか。とかく、遠見母娘に分の悪い査問委員会は乙姫と灯華というジョーカーの出番により無事その身が竜宮島に留め置かれる事に決まり、そして真矢は竜宮島の戦力として数えられることになった。

弓子の隠していた真矢の能力は一騎には劣るものの、それは即戦力

として申し分ないものであった。総士や乙姫、史彦といった上層部の前ではじめての訓練でその能力を開花させた。今まで居なかった遠距離による狙撃手の組み込みは戦いに大きな変革を齎すのだが、総士はまだ実戦に投入するのは早いと零し乙姫に呆れられていた。

そんな真矢の訓練の様子を見たいと灯華は進言していたのだが、それよりもこつちが優先だと保と容子にクリエムヒルドに叩き込まれた。灯華と一騎、クリエムヒルドシステムとマークザインのクロツシングの調子をみるためだ。先日の不調が一体何だったのか。灯華の体感的には不調ではなかったのだが、傍から見れば不調以外何もかもなかったため渋々言に従いニーベルングに指を通した。

「マークザイン認識。クロツシング」

ジークフリードシステムなしの単独クロツシングは初なので今までとなかにか違うかもしれない、そう保に言われていたのだがシステム的には何も代わり映えはしない。はずなのだが。

「灯華・・・近い」

「やっぱり近い、ね」

前回の戦闘時と同じく一騎と「近い」のだ。数値もグラフも何も変わらない。だが、一騎の全てが体感的に「近い」のだ。それは声にも現れ、灯華の聞く一騎の声は今までと同じシステムを介しているはずなのに、肉声のそれと変わらない。だが、それは決して——不快ではない。

「ね、一騎慣れるまで話そうよ」

「いいのか？」

「真矢の訓練終わるまで時間かかるだろうし。終わったら小楯さんが教えてくれるよ」

「そっか」

「ねえ。新国連の基地つてどんなところだった？」

今までと違うことが戦闘中に起こったためにあんな恐慌状態になってしまっただけで、灯華の提案による会話を続けるうちに段々と「近い」状態にも慣れていった。不快なものでもなく、ましてや悪影響を及ぼすものでもない結論づけ保と容子に伝えると、2人のほう

でもデータを見ながらその結論に同意したため2人だけのクロッシングは一騎の報告会と化したのだった。

「溝口さんがいっぱいいてぐるぐるまわってる〜」

ヴァーンツベックで本島に戻ってきたところでもなにやら真矢の楽しげな声が聞こえてきた。溝口の前で真矢が笑いながら絡んでいるらしいが、その姿は見事なまでに酔っ払い。今まで初訓練をしていたはずじゃなかったのかと一騎と一緒に近くによると、溝口から丁度良かったと手招きされた。

「どうしたんですか？」

「シナジエティックコードの影響で酔っ払ってな」

一騎の問いに溝口が答えると、真矢があらははははははははははと陽気な笑い声で合いの手を入れてきた。こんな風に酔っ払い化する人ははじめてみたので灯華は真矢の前に膝をついた。

「真矢〜大丈夫？分かる？」

「あく灯華だあ。大丈夫大丈夫へーきだよお〜」

「なんか酔っ払ったときの溝口さんみたいになってるよ真矢」

「え〜それはや〜だ〜。それよりもどこいったの〜？」

「一騎と特別訓練」

「え、いいなあ。私も灯華と一緒に良かったよお」

真っ赤な顔のまま真矢が肩に腕を回し体重をかけてきたので尻餅をつきつつ抱きとめてやった。酔っているせいか全体重を上半身にかけられずると体が押し倒されてゆく。だというのに溝口は戦友になるんだから送って行ってやれと言葉を残しどこかに去ってしまった。大人のくせに薄情だあとと言うとそうだねそうですねと同意しつつ真矢はそれまで以上に体重をかけてきた。

「あ、無理限界。一騎ヘルプ」

パタン、と廊下の上で真矢に押し倒されてしまった。

「えへへ灯華ふかふか〜」

「じゃないー！ここは廊下。お風呂じゃない。OK？」

「えーケチー」

「一騎早くヘルプ！」

真矢が灯華の上で不埒な動きを見せているせいか、健全な少年は真っ赤な顔をして後ずさっている。廊下のど真ん中での事に灯華は若干焦っているというのに、一騎はヘルプの言葉を無視して尚も後ずさる。こんな所誰かに見られたら泣ける、と思っていたところに足音が。終わった——そう思っていたが、聞きなれた声に安堵した。

「何をしているんだ」

「総士君と乙姫ちゃん元気〜?」

「元気元気——!」

「よーしいい子だ」

灯華と真矢の格好を見ても通常営業の皆城兄妹に少しは突っ込んでくれないと居たたまれないと思いつながら総士に助けを求めることにした。

「総士ヘルプ!一騎使えない!」

「・・・本当に何をやっているんだ」

総士は深いため息を吐きながら灯華の上でなにやら満足げな真矢を引き剥がし一騎に押し付けてくれた。女の子とはいえ同年代の子の体重は結構な加重で助かったあと深呼吸をしながら起き上がると一騎が先ほど以上に真っ赤な顔をして慌てている。

「お前が責任を持って遠見を送り届ける。戦闘指揮官としての命令だ」

「ええ!」

「灯華、今から時間はあるか?遠見の事で話がある」

「あ、うん。あるある。という事で一騎、真矢をお願いね」

立ち上がり制服についた埃を払い総士と乙姫の後ろを付いてゆく。なにやら一騎と真矢が叫んでいるがばいばい、と手を振って2人と分かれた。

「乙姫ちゃんは今日はどこに行つてたの?」

「私は総士と一緒に真矢の訓練の見学」

「乙姫ちゃんも行つてたんだ」

「うん。真矢はとても頑張ってたよ」

「乙姫」

「はいはい。あ、私は芹ちゃんの所に遊びに行ってくるね」

「了解。今日は遅くならないように気をつけてね」

「うん。行ってきます」

近場にあつた外部用通路を小走りでゆく乙姫の後姿は普通の少女と何も変わらないな、と思いつながら見ていると無意識に足が止まっていたらしい。いくぞ、と総士に声をかけられそのことに気付き足を動かした。

「どこ行く?」

「僕の部屋で良いか」

「うん」

近場の総士の部屋に入り、いつものように備え付けの椅子に座ると画面が表示されているタブレット型情報端末を渡された。そこには今日の訓練時のものと思われる真矢の戦闘情報が載せられている。シナジエティックコード形成数値は既存の乗り手の中では下位であるが、狙撃の腕は優れているらしく溝口からの太鼓判を押すコメントも添えられている。

「総士の感想は?」

「・・・使える、とは思う」

「近接戦闘に特化した機体ばかりだったから、遠距離攻撃機体があるだけで凄く助かる面は多いよね」

総士は灯華にドリンクを渡し、向かい合うようにベッドに座った。「狙撃の腕は確かに驚くべき程だ。だが彼女はまだ一度も戦場に立った事がない」

「けど、戦場に行った事はあるよ」

「・・・そうだな」

気乗りしない様子の総士に灯華は肩を竦めた。

「大事な友達だもん。ファフナーに乗せたくないよね。コード形成数値が低いとはいえ、一度乗ってしまえば同化の一途。甲洋君みたいになる可能性だってある」

「ああ」

「でも、戦力は戦力として数えなきやいけない。——多分私達がどう

こう言おうと、大人は真矢を戦力して数えるよ」

子供は守るものとしながらも、子供でなければファフナーに乗れない背反は大人達を苦しめる事象であれど彼らはその決断をするのだ。1年前に行われたL計画が実行されたことからそれは見て取れるし、だからこそ灯華はこの島の大人は信頼に値すると思えるのだ。すべき事をきちんと成し、かといって自分たちの心も素直に見せる。島を守るためには仕方の無い事なのだと頭を下げる大人だからこそ、子供も素直に従えるのだ。

「少しでも長くこの島を守るために。少しでも島民を生き永らえさせるために。それは私達の願いでもあるしね」

「灯華は優しいな」

「そうじゃないよ」

灯華は端末をテーブルの上に置き自分の指を眺める。この前より少し濃くなった赤い痕を指でなぞるのは最近の癖になっている。

「多分、次に居なくなるのは私だよ。私の次にクリエムヒルドに乗る人は見つかってない。・・・だから少しでも戦力を上げておきたい」
指輪の痕が日々濃くなっていくように思うと千鶴に言えばそんな事はないと言っていた。ただの錯覚なのだろうが、身体の刻限が迫っている事を持ち主に教えるためにそう見えるのだろうか」と灯華は思っている。その思いを考え出すと指が微かに震えてくる。

「やだな」

「・・・」

「まだ、ここにいたいな」

小さく呟いてしまった居なくなる事への恐怖。生きていたいという望み。

総士も同じ立場だというのに自分一人が弱音を吐いてどうするのだ、と顔をあげてごめんねと告げようとするとその前に腕を引っ張られ総士の腕の中に収められた。温もりと香りに反射的に総士の背に腕を回し制服を握ってしまう。

「乙姫ちゃんだって、総士だって同じなのにごめん」

「誰だって居なくなるのは怖い。僕だって・・・」

最後まで言葉が続かなかつたのは男の子としての矜持なのだろう。灯華が腕に力を込めると総士も応えるように力を込めた。暫くして力を緩め総士を見上げると、目が揺れていた。見ない方が良いと判断し目を閉じると総士がキスをしてきた。背に回していた腕を総士の首に回すと、今度はぶつける様にキスをしてきたのを受け止めた。

「居なくなる時は傍にいる」

「・・・うん」

2人縋り付きながら、守れない守られない約束をして居なくなる事への恐怖を少しでも薄めるのだ。

次の日真矢は戦場に立ち、見事な戦果をあげた。

いつかのそら10

U計画となにやら物々しい名前のついた弓子発案のイベントは職員会議の様相を呈したAivis会議で了承された。黒板に書かれたその計画の中身を知るものが見ればすぐにその内容が日本の夏の風物詩、夏祭りだとすぐに予測が立つだろう。竜宮島の中で夏祭りを知るものは西尾家の長老のみで全てアーカイブのデータから復元するのみだが、久々の「楽しい」だけのイベントに子供のみならず大人も張り切って準備をすすめるのだ。

「灯華、咲良しらね？」

「咲良ならさつき出て行ったよ」

「ふーん。じゃ探すか」

「そだね。あ、真壁も後で体育館行こうよ。一緒に燈籠作ろう」

黒板の淵を雑巾で拭いているところに剣司と衛が咲良を探してやってきた。灯華を誘ったように燈籠作りを咲良にも提案するようだ。丁度灯華も燈籠作りをするつもりだったので首を縦にふると後でねーと衛と剣司は件の咲良を探しに行ってしまった。

「燈籠を、作るのか？」

「うん。果林の、作りたくて」

最初の犠牲になった蔵前果林の家族は既に亡い。書類上では皆城家の養女であるが最期まで蔵前姓を名乗っていたため本人もましてや灯華も総士もその感覚はあまりない。ただ友人のために燈籠を作るのだ。

「総士も作るでしょ？皆城のおじさんの分」

「・・・そうだな。乙姫も呼ぶか」

「それが良いと思うよ」

教室の掃除が終わり灯華と総士は共に連れ立って下級クラスを覗いた。教室の後ろの方で友達と笑いあっている乙姫を見つけ名前を呼ぶとあ、と言ってこちらにやってくる。その様子はただの人と、ただの子供と変わらない。

「乙姫ちゃん、燈籠作らない？」

「燈籠。総士は？」

「作る。父さんの分を。乙姫も一緒に作るか？」

総士の申し出は乙姫にとって意外なものだったらしく驚いた様子だった。だがすぐに領き3人で体育館に向かった。体育館では既に十数人の生徒が集まり燈籠作りを大人に教わりながらはじめていた。いきなりの乙姫の登場に大人たちはぎよつとしていたが、他の子と同じように和紙片手に説明を聞く姿は先ほどまで相手をしていた普通の子供と変わらないためか段々と落ち着いていった。あらかた聞き終え端のほうでいざ製作を開始しようとするところで剣司たち3人とカノンが一緒にやってきた。珍しい組み合わせだと思いつながらこつちこつち！と手を振り合図をすると4人は近くにやってきた。

「やつほー」

乙姫が軽い挨拶をすれば4人のパイロットは身体を固くしていた。乙姫の存在は知らされ垣間見てはいたがコミュニケーションをとるまでは至っていなかったためどう反応すれば良いのか戸惑っている様子だった。

「あれー？どうしたの皆。あ、乙姫ちゃんも来てたんだ」

「やつほー真矢。真矢はどうしたの？」

「私も燈籠作ろうと思って。・・・翔子の」

その後ろから真矢が顔を出した事で雰囲気を一変する事ができた。真矢と乙姫は面識があったため普通に話しかけたのだが、どのような反応をすればよいのか決めかねていた剣司たちにとっては良い手本になってくれ真矢のそれを真似るようにした。

「なあなあ、総士の妹なんだよな」

「そうだよ。総士が私のお兄さん」

「なんか意外」

「もつと固いかと思ってた」

「えー私固くないよ。ぶにぶにだよ」

「あはは。近藤君が言いたいのはその固いじゃないよ。性格がって事」

「総士はほんつと真面目だからねえ」

いつぞやの様に乙姫は咲良と真矢に両頬をつつかれていた。

皆城公蔵、蔵前果林、羽佐間翔子、要誠一郎。大切な名前を書いた
燈籠を作り皆一度家に帰ると言う。

「乙姫ちゃんはお祭りどうするの？」

「芹ちゃんと里奈ちゃんと一緒に行くよ」

「そっか。浴衣着たいよね」

「うん。着たい」

皆と別れてA l v i s内の灯華の部屋で時間を潰していたのだが、
お祭りといえば浴衣という伝統衣装をどうやって着ようかと悩んで
いるとふ、と乙姫が遠い目をしていた。

「凍結されたよ。甲洋が」

差し出された手を繋げば視界が変わり、医療エリアを俯瞰してい
た。各部屋の監視モニターの映像かと思ったがどうもそれらしい角
度ではない。乙姫に意識を向けると彼女が頷いたのでおそらくこれ
は、空気中のミールを介しての映像なのだろう。本当に何でも見える
のだと思いつながら甲洋の入ったカプセルを見れば、顔が見えていた強
化ガラスの表面は冷気で凍結しもう見えなくなっていた。これから
ゆっくりと彼の身体は凍らされてゆくのだろう。

「明日、皆に言っても良い、よね」

「うん」

甲洋への術は手を尽くしたがもうどうしようもないらしい。彼は
今人間とフェストウムの狭間のものとなり、どちらでも無い存在のま
まであればよいのだが先の戦闘はフェストウムに近しい存在となっ
た甲洋を迎えに来たものと判断された。

「死んだわけじゃない」

「うん」

「・・・春日井君も死にたいわけじゃないよね」

「うん」

彼女達ではどうしようもできない事に手を繋いだまま互いに寄り
添った。

「お世話になります」

「いらっしやーい乙姫ちゃん灯華」

結局浴衣問題は遠見家に頼る事となった。灯華の浴衣は真壁家にあつたのだが乙姫はどうしようかと相談すれば真矢の幼い頃のがまだあるからとそれを乙姫に貸してもらおう事となった。はじめての浴衣にじつとしていられない乙姫を宥めながら灯華は弓子に着付けてもらった。

「タオルでも入れようかしら」

「暑くなりますよね」

「そーねえ。暑いわ」

「無しでお願いします」

「じゃあ乱れた時の直し方も教えておくわね」

弓子は手際よく灯華に浴衣を着付けてくれているが真矢はどうするのだろうかと思つた。隅の方をみれば自分で着付けをしている。

「真矢自分で着れるの!？」

「うん。お母さんに教えてもらったの」

「でも着れるだけよ。最後は私か母さんに直してもらわないとね」

「でもすごーい。私も覚えたいなあ」

「浴衣なら慣れれば簡単よ。今度教えてあげるわ」

「弓子先生ありがとうございます！嬉しい！」

着付けの終わった3人は共に連れ立って祭りの会場に向かおうと思つていたのだが、乙姫はなにやら忘れ物があると手近な入り口から再びA i v i sに戻ってしまった。急に地面から現れた入り口にひいっと真矢が驚いたのが面白く笑いながら会場に向かうと真矢が少しすねてしまった。

「もー灯華笑いすぎ！」

「おーい真矢！灯華！」

同じく浴衣に着替えた咲良とカノンと合流し男の子組みとの待ち合わせ場所へとむかった。

「カノンも浴衣着たんだね。うん、すごく似合う」

「そ、そうか？」

「うん。なんかエキゾチック。いいなあ」

大人っぽい柄の浴衣は日本人とは違う顔つきのカノンには非常に似合っていたのだが、隣を歩くとなると自分の濃いピンク色の浴衣がとても子供っぽく思えてしまう。灯華は新しい浴衣をおねだりしようと思った。

「あ、あそこにいるの近藤君たちじゃない」

「本当だ」

屋台の一角の前で待つ男の子組と合流しいろいろな店を冷やかす事にした。パイロット組という事で目を引いたがその分屋台では大量におまけをもらえるので空腹は非常に満たされ、射的で真矢が流石の技を見せ付け、ヨーヨー釣りではカノンが無双をしていた。前回とは違う面々での祭りだったが日頃の辛さ苦しさを忘れられる貴重な時間となったのだった。そして祭りのラストの燈籠流し。

「綺麗ね」

風に揺らめく水面に反射する仄かな灯はとても綺麗でとても物悲しいものだった。

「甲洋が居なくなった」

凍結処理が施されたはずの甲洋の身が消えたと朝からA l v i sの一角は慌しく動いていた。本島内から何件か甲洋を見かけたとの連絡が入り、溝口は喫茶店で邂逅したとの報告があがってきている。一体誰が何のために。甲洋の封を解くことによる利は何も思いつかないのだがふと祭りの日の乙姫との会話が思い出された。

「…乙姫ちゃんを探してくる」

「分かった」

総士もまた乙姫の関与を疑っていたらしく素直に灯華を送り出してくれた。一体何故彼女がこんな行動をとったのか。同級生で同じ戦場を生きてきた戦友で、数少ないフェストウムと同化した同胞。凍結処理は仕方ない事ではあったが、だが甲洋が灯華や乙姫のような選択をするかもしれないという希望もまだあったことも事実。乙姫はその希望を捨てていなかったのだろうか。総士も灯華も最早諦めていた事をまだ諦めなくて良いのだろうか。

「乙姫ちゃん！」

「早かったね灯華」

「そう、でもないけどね」

乙姫の居場所は分かれどその場所までは自分の足で進むしかなく、日が陰ってきた頃ようやく到着する事ができた。何を思ってたか乙姫とその友人達は一騎たちが甲洋と共に籠城している空き家に近いところで立ち話をしていた。

「乙姫ちゃん。春日井君を連れ出したのは貴方？」

「うん。甲洋を封印する事は誰も望んでいなかった。甲洋も望んでいなかった。だから私は蓋を開けたの」

「春日井君に選ばせるため？私達と同じように」

「そう。彼の中で鬨ぎあっている今ならまだ選べる」

「でももし、」

「それも彼の選択。けれど、大丈夫だよ」

大きな音を立ててメガセリオンが場を離れた。完全なフェストウムへと向かった場合の保険で出撃していたはずの機体はその場を離れたという事は。

「甲洋は誰も同化しない事を選んだよ。まだ彼は彼として存在する事を選んだの」

「乙姫ちゃん、ありがとう」

灯華はおびやかな感謝の言葉を放ちその場を離れ走り出した。乙姫はそれに気を害した様子はまったくなく笑顔で灯華に手を振って見送っていた。

乙姫の意識の中で甲洋の選択は限りなく予見できた事であった。フェストウムに同化され取り込まれなかった人間は数は少ないながらもまったく居ないわけではない。その先が何になるかは同化された人間に依るものであるとは思っていないかった。全てはミールに依るものである、と乙姫は知っていた。フェストウムに同化され個を失わずに済むのもミールによる気まぐれ、もしくは気にも留まらない些細な事。だがその気まぐれや気にも留めない事はフェストウムという種族ではありえない事であったのだが彼らにとってはそれすら些

細な事で認識すらしていなかった。それを知る乙姫は竜宮島のミールならば、島民や乙姫によつて齎される情報を取り込んでいる竜宮島でなら更なる変化が起こりうると確信し蓋を開けたのだ。そして甲洋は選んだ。そしてこの事実から乙姫は自分のすべき事が着々と成されてゆく事を実感できたのだ。

「もうちよつとなの。もうちよつとで島のミールが分かってくれるの」

乙姫が島のミールに教えられることは膨大だ。岩戸の中ではできなかった直接的なやり取りによつて島のミールが急速に様々な事を学んでいるのだが、乙姫が最もミールに教えたいものはひとつだった。いや、ミールは乙姫から与えられるままに情報を蓄積するだけでミールに学んでいるという認識はない。全てを受け止めるからこそ乙姫は最も分かつて欲しいものを小さく注意深く教えてゆくのだった。

〇

瀬戸内海ミールと呼ばれるものは生と死をそれまでに知っていた。如何にして人間が生まれ、如何にして人間が死んでゆくか。人間の終わりは死でありそこに付随する「悲しみ」は人間にとつて最も強い感情のひとつでもあるも、無くして良いものだと思つたため死を齎す生を止める事にした。それは彼らの最も強い感情のひとつ幸福を齎すはずだったのだが、人間は生を齎さないと分かつていてもその行動を止めなかった。無駄だと分かつていても繰り返されるその行動に意義を見出せないミールはそれを眺め続けた。そのうち人間は自らの胎内ではなく他の物によつて擬似的な生を生み出すことをはじめた。生き物ではなく機械によつて齎される生にミールは影響を与える事ができなかつた。彼らは擬似的な生による死にも悲しみを感じていくにも関わらずそれを止めようとはしない。それを眺め続けてきていたところ、ある時皆城乙姫と呼ばれるコア型が大量の情報を齎してきた。この島について、人間について、人の感情について、そして生と死の更なる情報をも彼女は齎した。それは命。生と死に付随する命と呼ばれるものをミールに与えたのだ。それがどういったものか

を完全に理解したのではないが、ミールはある事をはじめてみた。するとその人間は最も強い感情のひとつ、「喜び」を持った。死を齎す生を与えると何故人間は喜びを持つのか。ミールは分からなかった。人間とその行動を起こしている同胞に擬似的なそれを与えてみた。同胞は未だそれに気付いていないが、彼女がそれによって何の感情を持つのか。ミールはそれを「楽しみ」に待っているのだった。

いつかのそらーい

まだ今月は半月も過ぎていないというのに5度目の戦闘が先ほど終わった。回数を重ねる度に皆の錬度が増してゆき、段々と戦闘の手順が固まると共にその時間も格段に縮まってきた。ひと世代前の型では棺桶、とまで称されていたファフナーに乗る時間が減れば減るだけ搭乗者への負担が減るため皆の技術向上は素直に喜ばしい。その反面で戦闘の頻度が上がってきている事からは、目を逸らした。

「つつかれたー。咲良、真矢お腹すかない？」

「すいたすいた」

「私も。どっか行こうよ」

「御門さんのところのケーキ食いたい女の子チームだけで！」

「いいねえいいねえ。溝口さんに楽園開けてもらってそこで食べようよ」

更衣室で灯華は咲良と真矢に帰宅前の買い食いを具申するとその提案はカノン以外に受け入れられた。カノンは今日は容子と一緒に食事の準備をすると約束をしているらしく、それが楽しみな彼女を無理に引き止めるわけにもいかなかった。そのため、次は一緒に行こうねと指きりをして約束をした。その後溝口に連絡を取り喫茶店の店主として働くよう可愛らしくお願いをすれば深い深いため息とともにりよーかいと間延びした返事が返ってきた。

「俺は帰るから適当に戸締り頼むわ」

「えー」

「おじさんも戦闘の後は休みたいの！カップはシンクに入れておいてくれば良いから」

「鍵は？」

「お嬢ちゃんが持つててくれや」

「えー」

「じゃーな」

持込のケーキとそれぞれの飲み物を配膳した後、溝口は扉にcloseの札を下げてどこかに行ってしまうという暴挙をやらかした。

店主としてそれは良いのかと思うが、3人だけの貸し切りなのだから文句も言えない。

「あ、この新作うまつ！」

「灯華ちようだい」

「いよいよ。真矢も食べるー?」

「食べる食べるー」

互いのケーキを味見をしながら御門家による新作の批評をし、そのケーキを食べ終わったところで話題は次のものへと移り変わった。女3人寄れば姦しいとの古人の格言は現代でも通ずるためか、彼女達の話題は途切れる事無く次へ、次へと変遷していった。戦闘が終わったのは丁度おやつ時の3時、少し日が傾いてきたなど時間を確認すれば既に5時近くになっていた。

「あ、弓子先生と道生さんだ」

「ほんとだ」

「らぶらぶだねー」

「あー・・・うん」

楽園の前の道を手を繋いで歩く2人をガラス越しに見る真矢の視線は居心地の悪そうなものだった。肉親のそうだった部分を見るのは気恥ずかしいとの言葉を添えて視線を逸らして空になったカップを弄っていた。

「でも良いなあ弓子先生。幸せそう」

「咲良だって近藤君居るじゃない」

「ぼっ！アイツとはそんなんじゃないって」

「はいはい。じゃあ早くそうなつてください」

「そうそう。早く付き合ってくれたほうがこっちもすつきりするし」

灯華と真矢の2人掛かりで剣司との関係を言い募られたせいか咲良は真っ赤な顔をしている。が、ここでやられっぱなしの咲良ではない。

「じゃあ反対に聞くわよ。真矢は一騎とどうなのよ。灯華は総士と！」

「か、一騎君とは何もないよー！」

「流石咲良さん。やられても只では起きない」

「じゃあ灯華はどうなのよ皆城くんと」

「おっとやぶ蛇」

「そうそう。一騎が居ないときだって総士がわざわざうちに着たし」

「えーそうなの」

「そうそう」

にやーと真矢と咲良に見つめられ逃げたい、と思うも2人が許してくれるはずもなさそうのでぽり、と頬をかいて目を逸らした。

「まあ嫌われてはないと思いたい」

「どうしてそんな消極的な」

「むしろコレに積極的な人がいたら教えてよ」

「まあ、それもそうか」

「真矢だつて一騎に積極的に好き好き言える？」

「それは、そうだけど」

「私は無理！ 恥ずかしい！」

「どーかん！」

「ええ。それだけー？ もっと何かないの皆城君との話」

「じゃあ真矢が一騎との話を提供してくれたら話す」

「そんなのないよお」

真矢がテーブルに頭を突つ伏した所で会話が途切れた。ああ、只々普通の会話のなんと楽しい事か。だが窓から見える景色は夕焼けの茜色を薄墨が覆い始める黄昏時。そろそろ帰宅しないとね、と灯華が言えば2人も無言で頷いてくれた。翔子が居なくなり、甲洋も居なくなった。明日はわが身かもしれないという恐怖は、この「普通の生活」を過ごせる時間だけが覆い隠してくれる。

「咲良、真矢。また、話そうね」

「そうねー今度はカノンも一緒に。あ、そうすると真矢とのバトルになっちゃうか」

「ならないよー！」

普通に楽しい時間。それは、
「また」得られるものだと思っ
た。

——ピツ、ピツ、ピツ

皆と合宿をし、今まで以上に士気が高まっていた。戦闘も今まで以上に楽に、そして経過時間も短くなる一方だった。パイロットたちへの負担が軽くなる。何もかもが順調だと、皆錯覚していたのかもしれない。

——ピツ、ピツ、ピツ

その一報が齎されたのは戦闘の始まるすぐ前のことだった。考えられていたことだったが、灯華はおろか総士ですらそれを予想はしておらず動揺が走った。目の前の戦闘を捨てて彼女の元へ走り寄るか？否、そんな事をすれば彼女は激怒するだろう。掌を強く握り総士と共に戦闘の準備をはじめめる。やもすれば震えそうになる体を気取らせないように目の前の敵を強く睨んだ。

——ピツ、ピツ、ピツ

着替え総士の隣で共にメデイカルルームの前でパイロット達を待つ。まだ彼女には会っていない。1人でメデイカルルームの中に入る勇気がないのだ。会いたい、けれど会いたくない。いや、見たくないのだろう。剣司と一騎の声が聞こえてくる。ぞろぞろと続く足音でパイロット全員がメデイカルルームにやって来たようだ。多分皆チェックを受けさせられるとも思っているのだろう。「総士、何があつたんだ？」

「剣司。中に入っても取り乱すんじゃないぞ」

怖がりでお調子者ではあるが、生徒会長を務める度量と頭の回転の速さはある。すぐに総士を押しつけて剣司はメデイカルルームへと駆け込み、他のパイロットも他に続いた。灯華もそれに倣おうと思うも、足が竦んで動かない。

「——入るぞ」

灯華の様子に総士が背を押すようにして促してくれた。ゆっくりと入れば規則的な音が続く。それが彼女——咲良の心音で、まだ彼女

がここに居る事の証だった。だが、メイカルルームの隅で横たわる彼女の目は見開かれ、眼は赤く染まっている。それが意味する事はここに居る者たちは誰もが重々知っていることだった。

『なあにそんな顔してーしゃきつとしなー!』

不意に元気な咲良の声が脳裏に蘇った。だが、その声音と目の前の咲良の姿があまりにも乖離し光景を体が拒む。

「っ、ぐっ……」

こみ上げてくる気分の悪さに千鶴がいち早く気が付き灯華の体を支えてくれた。

「灯華ちゃんこっちにおいで」

カーテンの奥になる洗面台の前にたどり着き体を屈めれば、体内をものが逆流してくる。慣れぬ行為に涙が溢れ、体がどつと重くなる。ああ、なんだこれは。今まで戦闘後でもこんな事なつた事ないのに。

「気持ち悪い……せんせ、気持ち悪い……」

「大丈夫。大丈夫だからね」

千鶴に寄りかかりながら処置をしてもらい、ようやく落ち着いたため千鶴の椅子に座らせてもらった。今日はこれ以上ここには居ない方が良いと言葉を貰い、メイカルルームを出ようと思ったところで澄美が息を切らせてやってきた。娘の状態を知らされ些か錯乱している彼女は娘を家に連れ帰ると叫んでいる。動かしてはダメだという千鶴との攻防をただぼうつと眺めていた。咲良は十分戦った。もう咲良を頑張らせたくない。澄美の言外での諦念をただただ聞き流していたがそれを聞いて一人動いた者がいた。剣司だ。

「咲良……」

泣きながら咲良の顔に触れる手とは反対側、それを咲良が握ったのだ。もう意識はなく、指一本、瞬きひとつできないはずの咲良が手を動かし剣司の手を握った。

「うそ……咲良……」

「要はまだ、諦めてない」

勝負がついてない、その一騎の言葉の通りなのだろう。あの咲良だ。同化現象ぐらいで諦めるような子ではない。隣に立っている総

士を見上げれば目があった。その視線は自身の発した言葉に一片の疑いを持っていないようだ。

「咲良だもん。そうだよね」

「ああ。あの要だ」

「その言い方、絶対後で怒られるよ」

「・・・それは怖いな」

小さく笑いを漏らせばやっと体に力が入る事に気が付いた。こんな体たらく、見られたらまた咲良に心配をかけてしまう。ぐ、と力を入れれば素直に体が動き立ち上がれる。

「・・・私もまだ諦めないよ。咲良」

8

「こうやって話すの、久しぶりだね」

「乙姫ちゃんはここが好き？」

「うん。お母さんが居るから」

Alvis最下部、キールブロックのジークフリードシステムの前で2人は揃って床に座り込み見上げていた。此処はAlvis内でも本当に限られた者達しか入れず、灯華と乙姫が気兼ねなく話せる数少ない場所だ。耳をそばだてられる事もなく、小言を言われることもなく。気が付けば2人床に寝そべるようにして、ウルドの泉で手遊びをしていた。

こうやって2人が直接会話をする事は久しぶりだった。夏祭り以降色々な出来事が起こり2人秘密の会話はよく行っていたが、顔を合わせる事は少なかった。秘密の会話でも意思の疎通はできるが、それでもこうやって他愛無い話をするのは楽しい事だった。

「乙姫ちゃんはおとどれ位？」

「私はあとちよつと。史彦達の考えてる事に間に合うか、わかんないな」

「そっか・・・私は、島に帰って来られるかな」

「大丈夫だよ。皆帰って来られる」

「乙姫ちゃんがそう言うなら大丈夫かな」

「うん。大丈夫大丈夫」

2人で顔を見合わせて笑いあっていると音がして扉が開いた。

「・・・2人とも何て格好だ」

「あは。怒られちゃった」

やって来たのは総士だった。灯華と乙姫のらしくない格好に柳眉を吊り上げたが、乙姫はにこにここと笑いながら立ち上がった。総士は立ち上がった乙姫の服の埃を払ってやっている。

「乙姫ちゃん、私出しておくね」

「どうして?」

「総士を呼んだんでしょう?たまには兄妹で語らうのも良いものよ」

「・・・すまない」

「いーのいーの。じゃあね」

彼ら兄妹の關係性を歪めた責は一体誰が担うべきか。ただその一端を持つ自分はその2人の語らいの傍に居てはいけないと思い、灯華は傍を離れた。

灯華が部屋で寛いでいると、総士が話があると訪れてきた。

「乙姫ちゃんとは話せた?」

「ああ」

「そう、良かった」

薦められるがまま総士は椅子に座り、端末を操作し灯華に渡した。それは史彦達が進めている新国連との合同作戦への参加プランであった。そこには既存のファフナーにジークフリード、そしてクリエムヒルドを搭載した機体を参加させるとあった。

「事後承諾になるがどうだ」

「大丈夫。出るよ、私も」

何も聞かされてはいなかった。だが、この島での出来事は全て乙姫へ筒抜け、更にそれは灯華にもすぐに伝わる事は総士も知っていた。だが、この事を総士は灯華に告げる事も相談する事もできなかった。ただでさえ人一倍同化の進んでいる2人だ。戦闘に直接関わるとなると、その結果は。

「総士はどれだけ居られるの？」

「十八時間は共に居られる」

「そっか。・・・私はどれだけ一緒に居られるかなあ」

癖になつてゐる指輪の痕を弄れば、総士にそれを止められた。

総士が十八時間居られるのであれば灯華は一体どれだけ体を保つていられるのだろう。総士よりもっと早い事はわかつていた事で、もしかしたら戦いの最中、という事も考えられる。生き永らえるためならば島に残る事が推奨されるだろう。

「残るか？」

「嫌よ」

「・・・そうだな」

もう指輪の痕は、灯華には紅く濃く色づいて見えている。千鶴も一騎も皆がそんな事はないと言うが、灯華にはもうくつきりと死線が見えているのだ。多分、ここで島に残ってももう体を保つのは難しいと自身でしつかりと分かっている。

「私は、自分の生き方を決めたの。島のために生きるって決めている」
「ああ」

「だから、最後まで一緒に居てね」

「約束しただろう。居なくなる時は、傍にいます」

「・・・うん。ごめんね、1人にしちゃうね」

「いや、僕もすぐに、」

それ以降総士は言葉を続けなかった。

居なくなる事への怖さ。誰もが持つそれを、2人は約束をする事で目を逸らしていた。互いを互いで支えるしかない脆さ。それにも気付きながら、未来が見えている2人にはどうでも良いことだと思つていた。

いつかのそら12

日の光が差し込んで来て目が覚めた。久しぶりに真壁の家で目を覚ませば、鼻をくすぐる良いにおい。また負けたと思いつつベッドから降り、寝巻きから着替える。洗面所で顔を洗い、簡単に髪を纏め台所に向かう。

「おはよ一騎」

「はよ。早いな」

「こっちのセリフ。久しぶりの家、ゆっくりすれば良いのに」

「それこそこっちのセリフ。キュウリ洗ってくれ」

「はい」

並んで台所に立つのもいつ以来だろう。少なくとも一騎が島に帰ってきてからは、初めてかもしれない。どれだけ自分はA l v i s に閉じこもっていたのだろう。久しぶりにあれとって、これとってで通じる会話をこそばゆく思いながら朝食の準備を続ける。

「2人とも早いな」

「おはよう叔父さん」

「父さんが遅いんだよ」

粗方の準備を終えるもまだ家主がやってこない。起こしに行くか、と一騎と相談しているところに史彦が居間にやってきた。そんなに遅い時間ではないのだが、と思うも久しぶりの団欒に一騎も調子が戻りきっていないのだろう。その証拠に少し頬が赤い。

「まあまあ一騎。おなかすいた。食べようよ」

何時もの通り不恰好な茶碗で食べる食事。何時も通りの日はこうやってはじまった。

朝食を済ませ片付けを史彦に任せ、自室でA l v i s の制服に着替える。部屋を出たところで一騎と鉢合わせたので、2人で一緒に家を出た。自宅から一番近いA l v i s への入り口は、家の前の階段を下りきった先にある。海風で髪をなびかせながらゆつくりと下りる。

「気持ち良いねー一騎」

「そうだな」

「海は青いし、空も青いし。良い日だね」

ぐ、と腕を空に翳し伸びをすれば一騎も真似をしてくる。

「なんか久しぶりに景色を見た気がする」

「最近それどころじゃなかったからね」

「ああ。なんか本当に久しぶりに空も海も見たな」

「青くて綺麗だよねー」

2人でゆつくりと階段を下りるも、いずれは終わりがくる。灯華のセキユリティカードを翳せば扉が開き、地下への階段が続く。

「今日は一騎はどこに？」

「ドツグに。羽佐間先生に呼ばれてるんだ」

「わかった。バイバーイ」

「ああ」

手を振って一騎と別れ1人メデイカルルームへとゆく。そこでは医療ポッドの中で静かに眠る咲良の姿。今日もまだ居てくれている、と安心して奥へゆけば千鶴がもうやってきていた。

「先生、お薬ください」

「はいはい。ちよつと待ってね」

棚から取り出された液薬を自動注射器で体内へと入れてゆく。あとどれだけこの薬が効いてくれるのだろうか。いや、もう効いていないのかもしれない。十個の赤い指輪の痕を見るも、何故か今心は風いている。

「先生。私、あとどれ位ですか」

千鶴が背を向けたのを見計らってそう、声をかけた。

「叔父さんの考えてる作戦。私も行けますか？」

千鶴の動きは少しだけ止まり、背を向けたまま答えが返ってくる。

「ぎりぎりまでファフナーに乗らずに居て、そこから十時間」

「良かった。行けるんだ」

「島に残る選択肢もあるのよ」

「はい。・・・でも、総士と約束したんです。私が居なくなる時、総士が傍に居てくれるって。だから私も行かないと」

「・・・そう」

「はい」

笑顔でメデイカルルームを出れば鳴り出すアラート。敵が来たらしい。急いで着替えクリエムヒルドに乗り込めば、もう総士はジークフリードに乗り込んでいた。

「早いね総士」

「まあな。遅敵まであと十五分。——今日はどんな敵が来るのやら」

「大丈夫だよ。総士も一騎も皆も居る。だから大丈夫」

今日もいつもと変わらない日である。そう思っていた。

8

スカラベR型種。そう人類が名付けたフェストウムは竜宮島内で暴れた。空間を捻じ曲げる戦法を取る未知の戦い方に皆、苦戦を強いられていた。決して多くないファフナーが次々と無力化され、残っていたのは一騎と衛の2体だけだった。フუნフのイージス装備により動きを止められたフェストウムをザインで押しつぶす。力技による攻撃は効果を見せはじめていた時だった。

「つぶあああああ」

一騎が雄たけびをあげて動きを止めた。

痛みの波にあわせて呻く一騎の眼は、金色に変色していた。

「同化、現象」

「なんで、一騎の方が早いのに！」

ザインの動きが止まった事を契機に、目のフェストウムが動き出した。表面を割ってでてきた根が蠢きながら島内を飲み込んでゆく。胎内をかき回される痛みに泣く乙姫、動けない一騎、A i v i s 内まで到達したフェストウム。一体どこから対処するべきなのか。悩む間もなく、フェストウムの触手がジークフリードシステムに絡みついた。それは向かい合わせのクリエムヒルドも同様で一本、また一本とシステムを覆ってゆく。その度に総士と灯華それぞれがフェストウムに侵されてゆくもまだ同化されていない。

「まだ！まだよ！一騎動ける!？」

衛の要請に一騎がなんとか腕を動かし、剣を構える。そこに衛が抱えあげたフェストウムを突き刺した。

そこで灯華の意識は暗転した。

夢を見ていた。まだ、灯華が岩戸の中でコアとして生きていた頃のときの夢だ。

自我も目覚めきらぬ時、島内に自分と同じ存在を見つけた。それが嬉しくてその子供と何度も遊んだ。その行為はクロツシングと呼ばれるものであるが幼い2人には分かるはずもなく、何度も何度も遊んでいた。それはただただ優しいだけの時間であった。

8

目を覚ませば、自分の周りにはフェストウムの根と思わしきもので全てが覆われていた。意識をすれば呼びかける乙姫の声が聞こえた。それに返事をすれば安心したようなため息が聞こえた。

——灯華、できる？

「うん。できるよ」

——居なくならないで

「まだ。大丈夫」

ニールング接続から右手を離し、手近なフェストウムの根を触れば緑の結晶で右腕全体が覆われてゆく。体の変異するという痛みに呻くも、乙姫の導きにより灯華とフェストウムの根が同化され消えてゆく。時間をかければかける程、フェストウムに触れる時間が長いほど、灯華自身の体の同化現象が進んでしまう。体力的にも限界が近い事を感じつつ、一気にその動きを早めた。粗方の工程を終える頃には、うめき声をあげる体力すら惜しい程になっていた。

「き、ん急脱出」

生きていた音声機能を使い、強制的にクリエムヒルドから降ろされた。自分とは反対側を見れば天井を突き破った根が、ジークフリードシステムに絡み付いている。

これも剥がさないと。

総士は灯華のように乙姫と一緒になりフェストウムを同化する事はできない。早く助けないと、それだけが灯華の頭にあった。

「総、士」

「だめっ！」

ふらり、ふらりと怪しい動きで足を薦めた灯華を、その場に居た乙姫が腕を掴んで止めた。

「これ以上無理をしちゃだめ」

「でも、総士が・・・総士が」

「一騎が助けてくれる」

「でも、一騎ももう」

「それでも灯華よりは大丈夫。——気付いてるでしょ？」

人としての境界線を、今の同化で、踏み越えてしまった。

多分もう、眼の色は金色に染まっているだろう。それでも総士を助けたかった。

灯華よりも脆い総士がフェストウムの中に居続ければ、確実に同化が進行してしまう。

「でも、やだ、やだ・・・」

「灯華、お願い。外に出て」

「総士、いやだ。総士が居なくなるのいやだ・・・」

灯華の方が先に居なくなると思っていたのだ。まさかこんな風に総士の方が先に居なくなるなんて事、考えた事もなかった。

防護服を着た大人たちに連れられて、灯華はメデイカルルームに戻されていた。最後の戦闘から既に10時間以上が経過した事、そして気を失っている間に衛が居なくなつた事を知らされた。

「先生、総士はどうなりました？」

「まだよ・・・だから今は眠りなさい」

「・・・はい」

鎮静剤や睡眠薬を投与し眠りに落ちてても、すぐに目を覚まして総士を心配する灯華。何度も何度も繰り返されるそれに、千鶴はもう灯華の体が限界である事を悟っていた。これ以上検査をしてそれを目の当たりにするのも辛い事だが、決まりだからと自分に言い聞かせて眠

る灯華の体をスキヤニングしていく。そこに示される数値は、やはり諸々の上限を振り切っており何時、何が起こってもおかしくない。それこそ、今日の前でという数値であった。液薬を投与しても何ら役には立たないだろう。そう思いながら、次のデータを表示し千鶴は息を呑んだ。

「そんな。．．．そんな、はずは」

そのデータは、千鶴にとってあり得ないものであった。この世代には起こりえない現象であり、また灯華の年代で常識として考えにくいものであった。他の方法で、と千鶴は眠る灯華の腕から血液を抜き取り検査する。

「いたっ」

「．．．ごめんね、目が覚めちゃった？」

「はい」

「もう少し、横になってね」

本人には何も告げずにした検査でも、同じ結果を示していた。

これは希望か、絶望か。

千鶴はその結果を告げるか告げまいか悩んだが、灯華には言う事にした。彼女の時間はもう余り残されていない。だが、本当ならこの事は——慶事なのだ。

「本当ですか…？」

「本当よ。私も信じられないけれど…心あたりはある」

「……あります。でも、私は！」

「ええ。でも、現実に居るわ」

「そんな…」

灯華が取り乱したせいかわ、医者としての千鶴は反対に内心の落ち着きを取り戻すことができた。あれだけの戦闘をこなせども、灯華はまだまだ子供だ。しかも灯華の親はもう亡い。誰かが肩を抱いてやらなければ。

——最後まで、誰かが守ってあげなければ。

ベッドの上で青い顔をする灯華を、千鶴は抱きしめた。ゆっくりと背を撫でると、腕の中からくぐもった泣き声が聞こえてきた。自分の

身すら明日を知れぬというのに、一人で抱えるには限界だったのだろう。何故子供達ばかり、と嘆くのは後でいい。今は、目の前で泣く子供をあやしてあげなければ。

「怖い？」

「……怖いです」

「いやだった？」

「……わかりません」

「じゃあどう思った？」

「私、もうすぐ居なくなるのに。居なくなっちゃうのに」

灯華が身じろぎをしたので、腕を緩め今度は肩を抱くようにする。千鶴から離れようとする素振りがないので、灯華の頭を自分の肩に凭れさせてあげると素直にされるがままになった。

少しだけ沈黙があり、灯華は自分の腹部に掌を当てた。

「あかちゃん、かわいいそう」

行った2つの検査は、共に灯華がその身に子を宿していると結果が出た。

千鶴達の世代は受胎能力を失ったが、その子供、弓子は自然受胎を果たした。その事からそれ以下の世代、主に人工子宮で生まれた子供達は受胎能力を失っていないと千鶴は考えていた。だが、灯華については別だ。灯華はイレギュラーな存在。元コアという存在は、人とフェストウムの狭間の存在だった。だから千鶴も灯華本人も受胎能力については無いものとしていた。

一体何故、どうして、どうやって。

研究者としての性が口から出てきそうになるが、それをなんとか堪え灯華の頭を撫でる。其の間も灯華の掌が腹から離れる事はなく、こんな状況でなければもう手を挙げて祝福ができるというのに。多分、灯華自身もそうなのだろう。事実、彼女から否定を意味する言葉は出てきていない。

「とりあえず今は眠りなさい？体が落ち着かなければ、何も考える事ができないわ」

首を縦に振った灯華は、今度は睡眠導入薬もなく眠ってしまった。

眠る事で現実を直視する事を先送りにするかのように。

「ごめんね灯華ちゃん。私では貴方達をどうする事もできない」

乙姫も灯華も、そして灯華の子も。

灯華が目を覚ましたときには、また、事が終わっていた。

弓子の慟哭がメデイカルルームに響き渡った。愛する人を亡くした人は、こうやって嘆くのかと他人事のように灯華は認識していた。ベッドサイドに置かれていた通信端末を手に取りデータをさかのぼれば、灯華が見たかった映像が映し出された。

——ジークフリードシステムが、消えた。皆城総士が居なくなつた。

傍に、居てくれるって言ったのに。

端末を置きなおし、シーツに潜り込み灯華は再び目を閉じた。

もういつそ、このまま目が覚めなければ良いのに。ベッドの中で小さく縮こまり、灯華はそう呟いた。

∞

目を覚ました灯華は、メデイカルルームを勝手に出てA l i v i s内の自室へと戻っていた。今までも千鶴が急がしい時は、勝手に検査をして勝手に戻っていたので、その様に動いたままで。千鶴は今、弓子から目が離せないだろう。彼女は妊娠していると聞いていた。自分たちとは違い、未来が約束された存在だ。妬みは確かにあるが、けれど弓子達を優先すべき事実も分かっている。

だが、顔を見ればその妬みが形になりかねないと逃げてきたのだ。

——灯華、部屋？

「いるよ。来る？」

乙姫が部屋に入ってきてても、灯華は寝そべっていたベットから起き上がる気力が無かった。それを気にした様子もなく、乙姫は床の上に座りベッドの上の灯華と視線を合わせてくれた。

「あかちゃん」

「乙姫ちゃん知ってた？」

「ミールが何かをしたのは知ってた。弓子の事だと思ってたのに、

灯華とは思わなかった」

「そっか」

乙姫は床に座ったまま灯華の頭を撫でてきた。今日はよく撫でられる日だ。

「怖いよ乙姫ちゃん」

「——うん」

乙姫もまた怖がっている事を知っているのに、自分より年下の女の子なのに、こんな風に零してしまうのは情けない。けれど、灯華にはもう乙姫しか居ないのだ。

「分かってたはずなのに怖い。こんなにも——一人で居なくなる事が怖いなんて、思わなかった」

ずっと総士が最後まで居てくれると思っていたから。

そして、

「あかちゃんも、一緒に居なくなっちゃうかと思うと、本当に怖い」

それは、灯華がはじめてみせた母としての言葉だった。腹部の服を握り締めているのも、その表れなのだろう。

「大丈夫だよ。総士はまだ、居なくなってるない」

「え？」

「フェストウムが連れ去っただけ」

「でも。どこに居るかなんて」

「紅音が教えてくれる」

「一騎のお母さん？」

「そう。だから、まだ希望はある」

乙姫の強い言葉は、まさに灯華にとっての希望と成り得た。絶望のなかの小さな小さな希望は、灯華にとってはとても輝いていた。その言葉は、島を完全に雪が覆った日に現実となった。

真壁紅音だったものを模しているミヨルニアという存在は、島にフェストウムというものを言葉にし表し、そして灯華が欲していた情報を置いて去っていった。それは紅音の願いを叶えるために付随したものでしかなかったが、欲しかった情報を得られ灯華は安堵の息を吐いた。

「まだ、総士は生きてる。まだ、居なくなっていない」